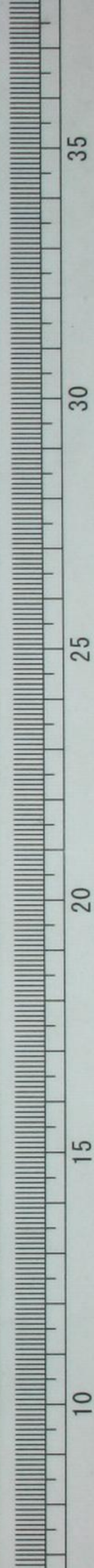




再撰
花洛名勝圖會
東山之部
二

113
528
2



4 13
528
2

山城巡行志

云此門院の御塔正堂の西阿弥陀堂の北有と

按此所は此大の五

又或説は扶桑畧記曰上東門院と大谷を桑うくはは城塔をんくつり今詳か

鐘藏 本堂の東傍より西向傳大士普建普成の像と安け藏經唐土福州開元寺の藏本

鐘樓 本堂の東南より延室 六年十二月十五日供養あり 洪鐘 高廿一丈八尺五寸厚九寸分

茶堂 本堂の前南側あり 奉平亭の額と掲げ 龍大サ金の畫より上高凡一尺三寸余

佛足石 茶堂の東隣 鎮守八幡宮 茶堂の西南あり 中央八幡大神 相殿天照大神

額 知恩教院 堅額 後拍原院 宸筆 今掲る其 往昔此所は元祖法然上人

の像と安け然る小満誓和尚の代ありたり 公命小依り當山の伽藍今の

如く御建營あり故上人の像と以て本堂に移り時此所は勢至菩薩を

安置せんと欲せり是則上人は彼薩埵の化現を謂たり然るとして意お叶ふ

天正十一年

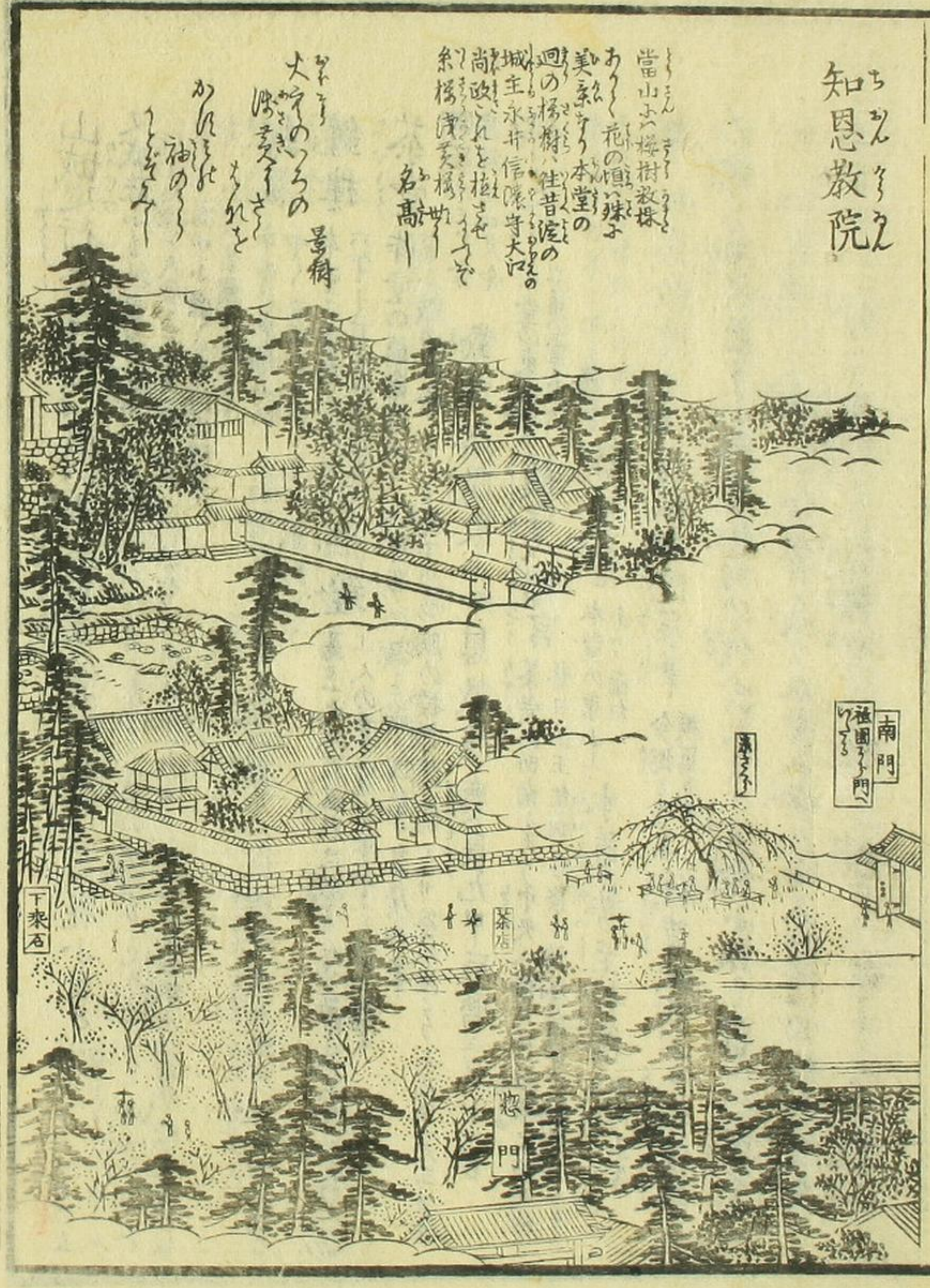


半山画

知恩教院

當山は梅樹教母
あり花の壇に殊ふ
美奈より本堂の
廻の梅樹は昔渡の
城主永井信隆守大に
尚政に梅を植さる
糸橋渡を梅樹の
名高し

大守のつらの
梅まきさ
かひは
神の



南門
社園門

下

茶店

忍門

下乗石

東山ノ四十四

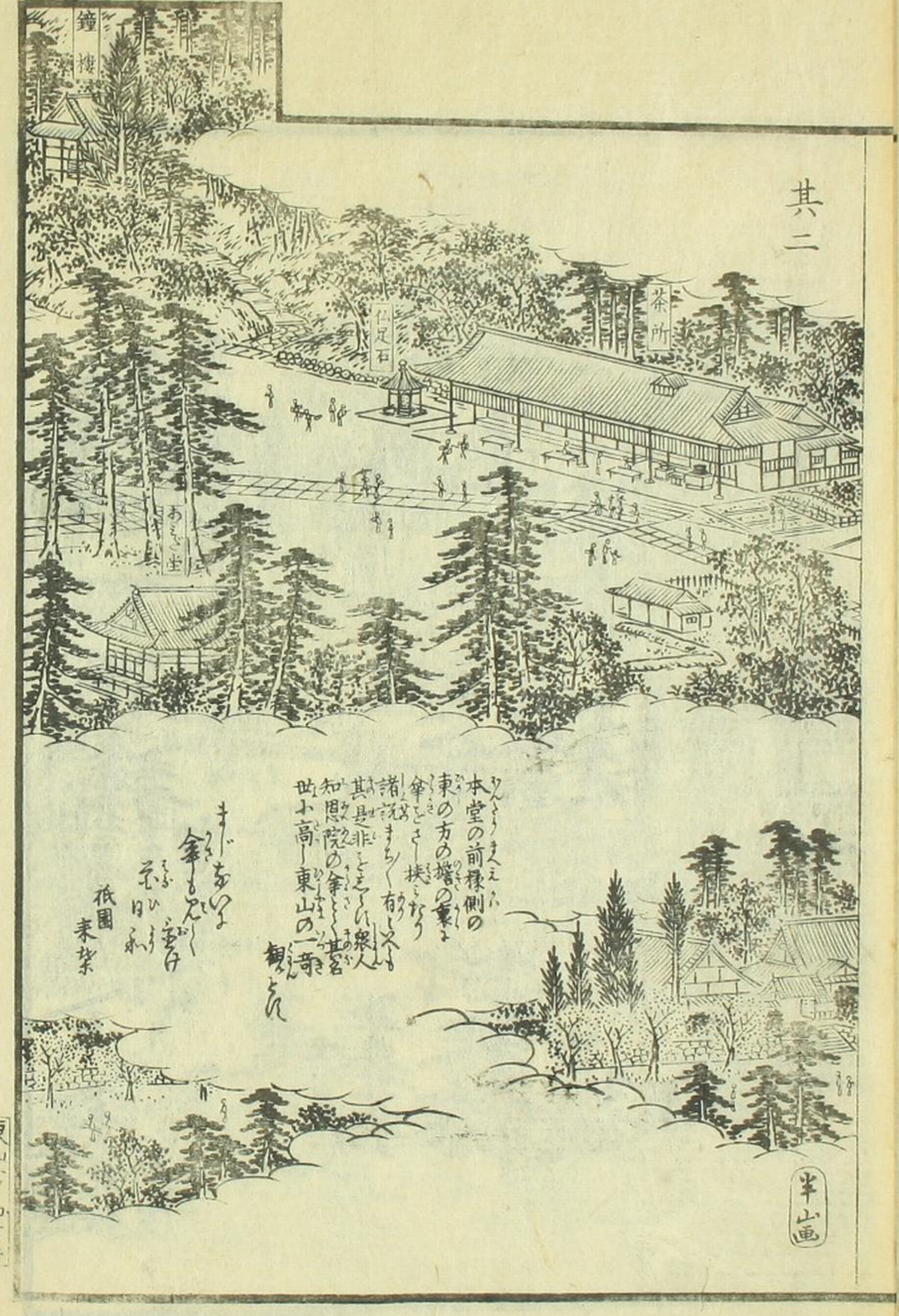


臨濟宗
全願寺旧跡

本堂

山門

其二



本堂の前棟側の
東の方の塔の裏
傘をさす杖をたたく
諸説あり有る
其是非を定むる人
知恩院の傘をさす
世小高東山の一景
観る

まのあたりに
傘をさす
杖をたたく
茶の湯
末茶
孤園

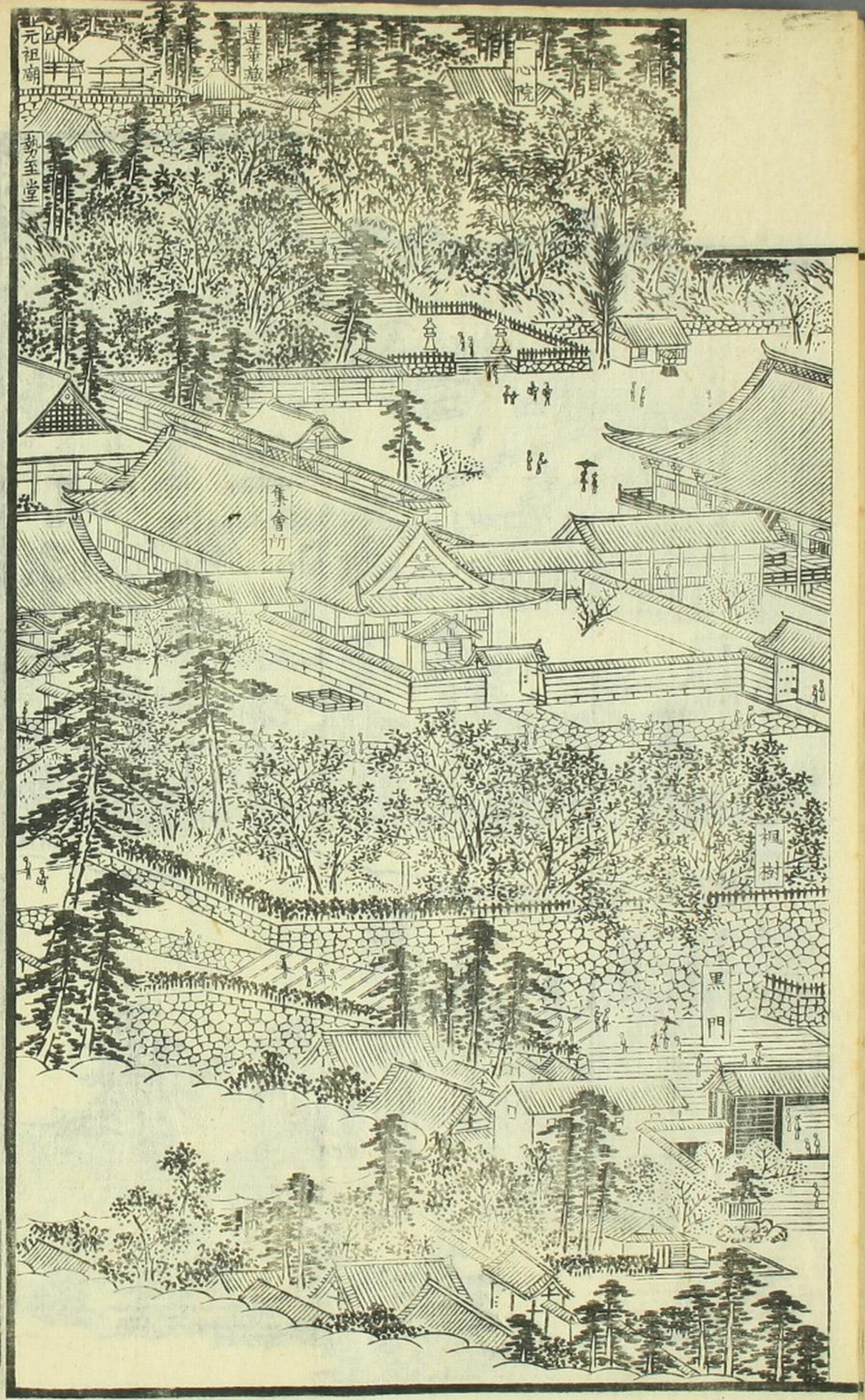
半山画

東山ノ四十五



一人之主
 大樹
 芥舍
 河本
 延之

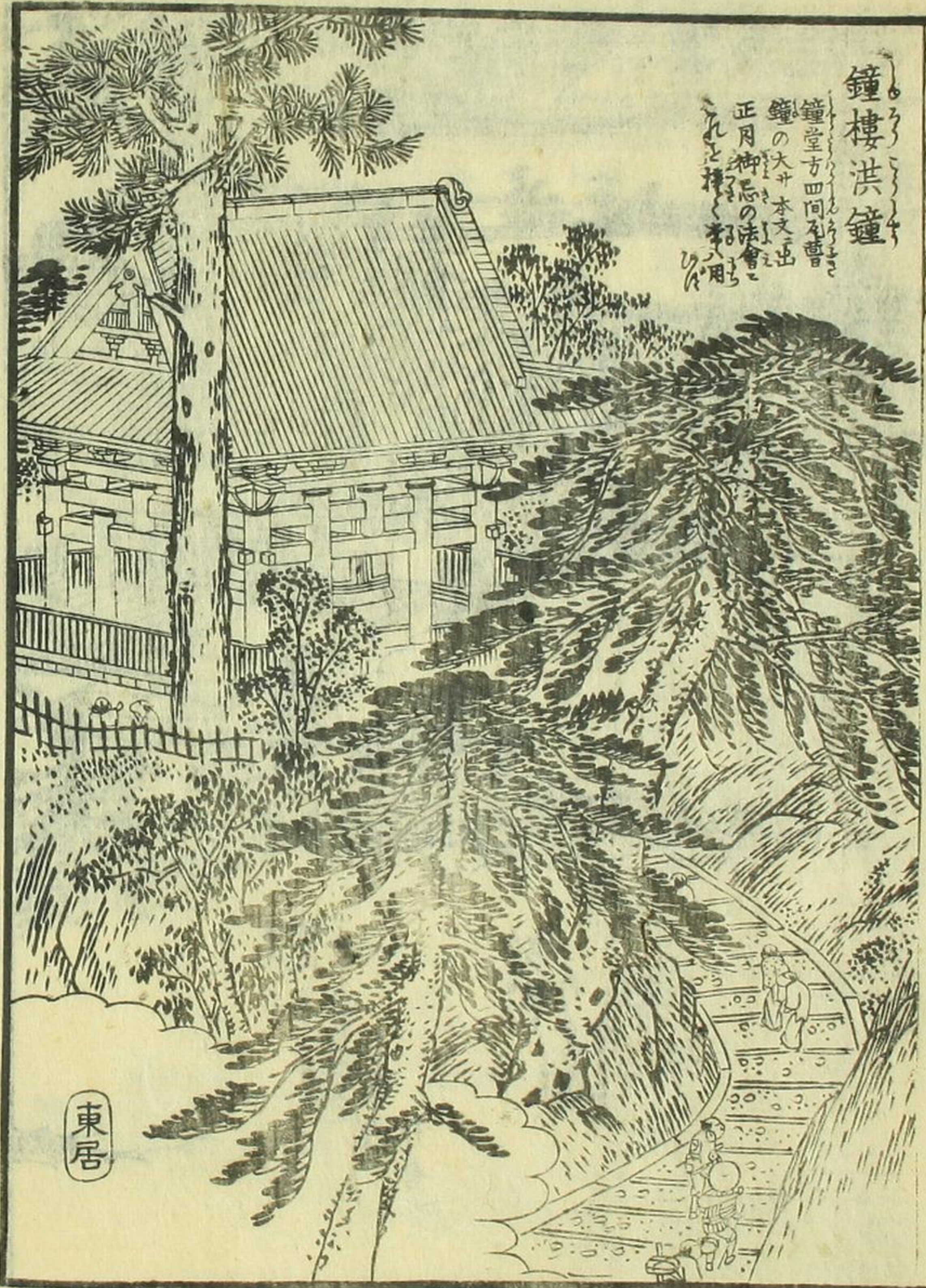
半山画



東山一四十六

鐘樓洪鐘

鐘堂方四間有曹
鐘の大井本文出
正月御忌の法會
これに捧ぐ御用



東居

像をくく猶豫せしれ、或時勢至の像を持来つて售んと言者有り即
 和尚是を告招く是を見ふ古作や相好圓滿は和尚頼み感悦く
 其價を同じく持来り者何地行かん尋めれ更に往方を知り復再
 び来るとれ見聞の輩これ今和尚の法徳より所と称し數奇貴と
 せり今の本尊是なり其後傳へ陸奥小堂より是即秀衡の造管と
 あり勢至菩薩と安ん其像忽ち失たう正しく此像長也と云
 元祖廟堂勢至堂の上の御子の内五輪の石燈と安ん
 十四日の夜一人の女を見たり其夢の上人の廟堂にありては庭の
 一人の老僧ありてはまじりて蓮華一莖とありては地を踏ん者ありては花とありて
 合せしこれと變るるちひひく發するぬ以御告ふれをさす彼輩墓を尋ねては
 合せし見し地景も活たがとさるるれは信浅くはれは世傳ふる小僧祥尼
 知恩院のへりありて夫より年々御忌と近く法會と執行たりと後拍原帝鳳
 詔を賜つて法則を定めしうり法然上人の御忌を修むと云云今ふりて
 天樂をたまはり其式は遠事なり一物拍子あり
 行導念仏あり亦以所謂なり

百練抄云安貞元年六月廿四日山門所司已下群集大谷邊破却法然丈

墓所是專修念佛事近日有山門之訃於彼墳墓興盛之故云但遺骨者門弟等偷掘出渡他所云

蓮華藏 廟堂の南小回り 紫雲水 勢至堂の東傍小回り大師入寂のとき

一心院 勢至堂の南小回り 紫雲水 勢至堂の東傍小回り大師入寂のとき

額一心院 横額 光源院義輝公筆 傳云本寺阿彌陀佛の像は白青蓮院に安置給

大方丈 木堂の後在 佛間 阿彌陀佛の立像を安置は安阿彌陀佛の作なり

拜間 金張附松の鶴の画 上段 床の再瀑布見李太白 中段 再鉄揚張果郎

下段 再劉文西王母画云 鶴間 金張附松の鶴の画 梅間 金張附松の鶴の画

裏上段 金張附松の鶴の画 菊間 金張附松の鶴の画 鷺間 金張附松の鶴の画

柳間 柳の画 座禪石 萬丈の庭に有慈徳和尚の坐禪石 集會堂 本堂の後在り南向

山門 本堂の西あり南向 額 華頂山 堅額 靈元法皇宸筆 閣上小室の秘迦仏

櫻馬場 山門の通りより只祇園の神領なり延宝七年代地あり開く所之路傍の櫻樹ハ

小銀治井 山門石壇の下小回り傳云三條小銀治宗近名初拜時 鐵盤石 小銀治の井の傍に傳云

本願寺舊跡 山門の北塔頭崇徳院の後小回り親鸞聖人遷化あつて鳥部山小火葬

知恩院宮御殿 黒門通北側あり 螢岩 東の山上五町ありにあり

太子堂舊跡 塔中光玄院の地あり 太子杉 同所の後小回り太子の植ふ

花園帝陵 右太子堂の旧地のつぎ東の山の手に知恩院方丈栗田鎮の境あり

園太曆曰慈嚴僧正記貞和四年十一月十一日太上法皇於仁和寺菽

原仙居晏駕仙筭五十二日來御脚氣御長病也同十三日御葬禮先幸

太子堂此内々御幸儀也御輿也雲客少々供奉於十樂院上山攝山作所奉

葬之御佛事等依御遺命於彼堂被修之仍於松原殿者無御中陰儀
或曰太子堂速成院也本在大谷十樂院青蓮院別號也十樂院上山
者今知恩院云尚薩戒記の説も是なり鶴林崇泰院の前林の地なり

常在光院古跡今の経蔵の辺なり相国寺説云建武年中尊氏卿建立開基の豊盛國師也或云栗田

口良恩寺小地蔵尊あり是常在光院の佛像なり又後然草云常在光院の釣鐘

の銘菅原在熟卿の草世尊寺権族朝臣清書なり或云常在光院の鐘今城心寺靈

聖院あり菟玖波集小前大納言尊氏常在光院より百段連奉侍あり

瓜生石山門の北黒門通の道の中往昔石の下より一夜瓜草生じ其蔓程を

石面ふまじり花を生じ又胡瓜を生じ其瓜半頭天王の文字ありとも

又感神院の字なり依見聞の人希有なり以石靈石なり王代貴々々

不浄を拂ひ又石末の事と禁じ終ふ其瓜を取栗田の天王の撰社小

納む以所りるる青蓮院の敷地なり故今に至る彼神社小胡瓜の鋒有

く祭日之と喫ひ也昔八祭日の前夜必し神輿と遊来り以石上より祭事あり

西の大門と閉く神輿と入り是より以義なりと云又栗田の天王の例祭の矛數本なり行

かり其中に胡瓜の矛と第一より以謂ふ也

尊光法親王塔山上小あり知恩院南門主良地は親王の後任中

天壽院殿塔山上あり豊臣秀頼公の室なり

廉貞院殿塔同所あり九條撰政道房公の室なり父ハ松平三河守忠直卿

尊智院塔内所あり尊智院清誉源覺光誓ハ三時智恩寺一代の住尼なり近衛

信尋公の息女なり三時智恩寺ハ代々清浄華院小葬む尊智院小至

當山葬る池田輝政塔右日院あり俗稱三五衛門同夫人の塔其外酒井家投野松浦本と塔

夫當山ハ元祖圓光大師宗風開運の靈地なり吉水の禪房ハ是也

初めハ東の山腹今の勢至堂の地也や大師入寂給ふと古瓶山の別院南禪院

夫より星霜さるる山門十二代の座主青蓮院慈鎮和尚法然上人の慈惠大師の草創の地なり

弘法を隨信まひ以地と寄附昔ハ今の四山封境面なり吉水と満譽和尚の代小

至つ台命を蒙つ峻岨と穿ち手垣今の如く伽藍御建言

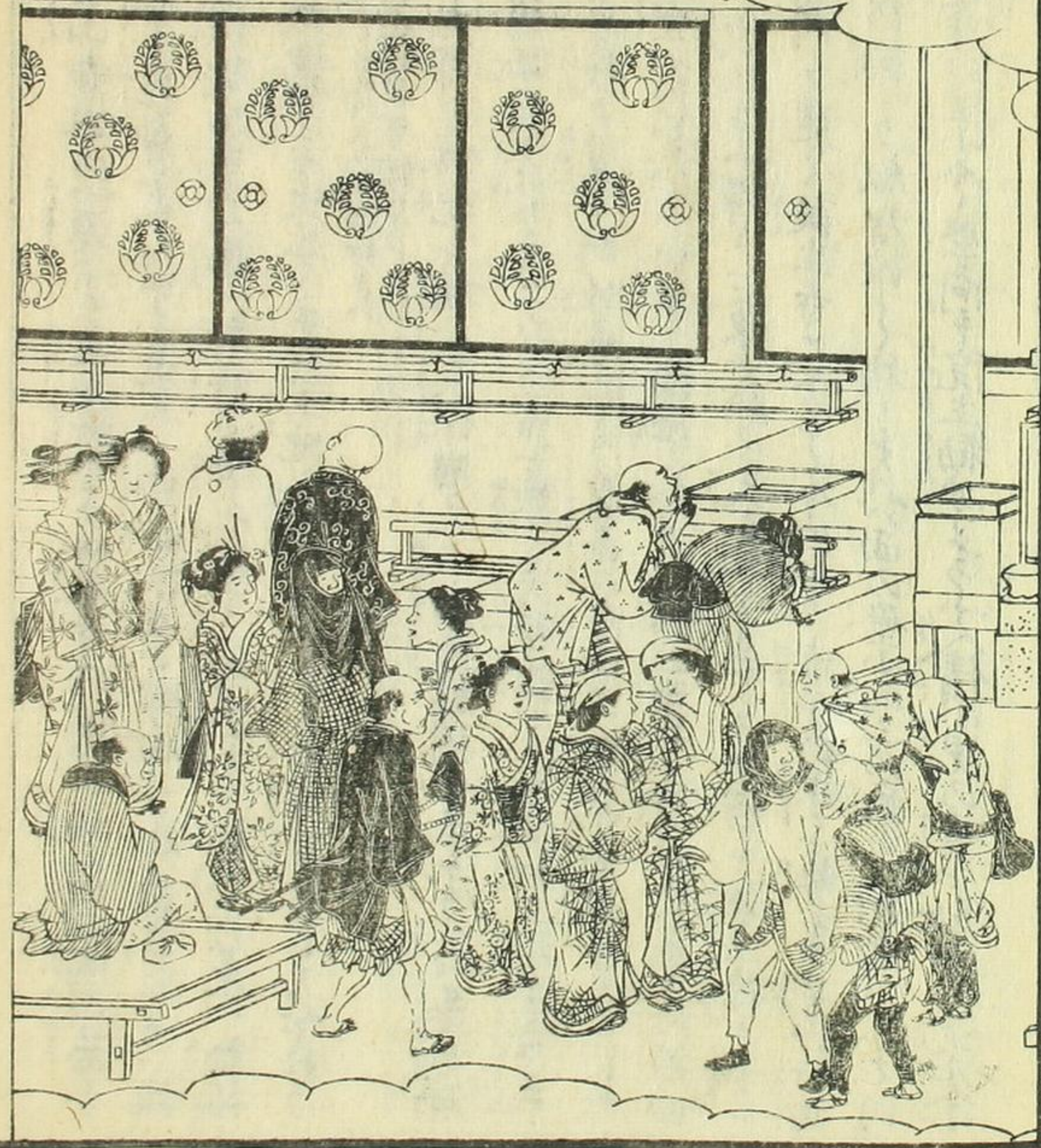
一宗第一の本寺是即前帝の詔勅の倫旨宗旨

摠本寺の號以小興世小海土四箇の本寺六實ハ四箇流の本寺なり

義義其四箇一ハ鎮西流二ハ西山義三ハ長樂寺義四ハ九品寺義也

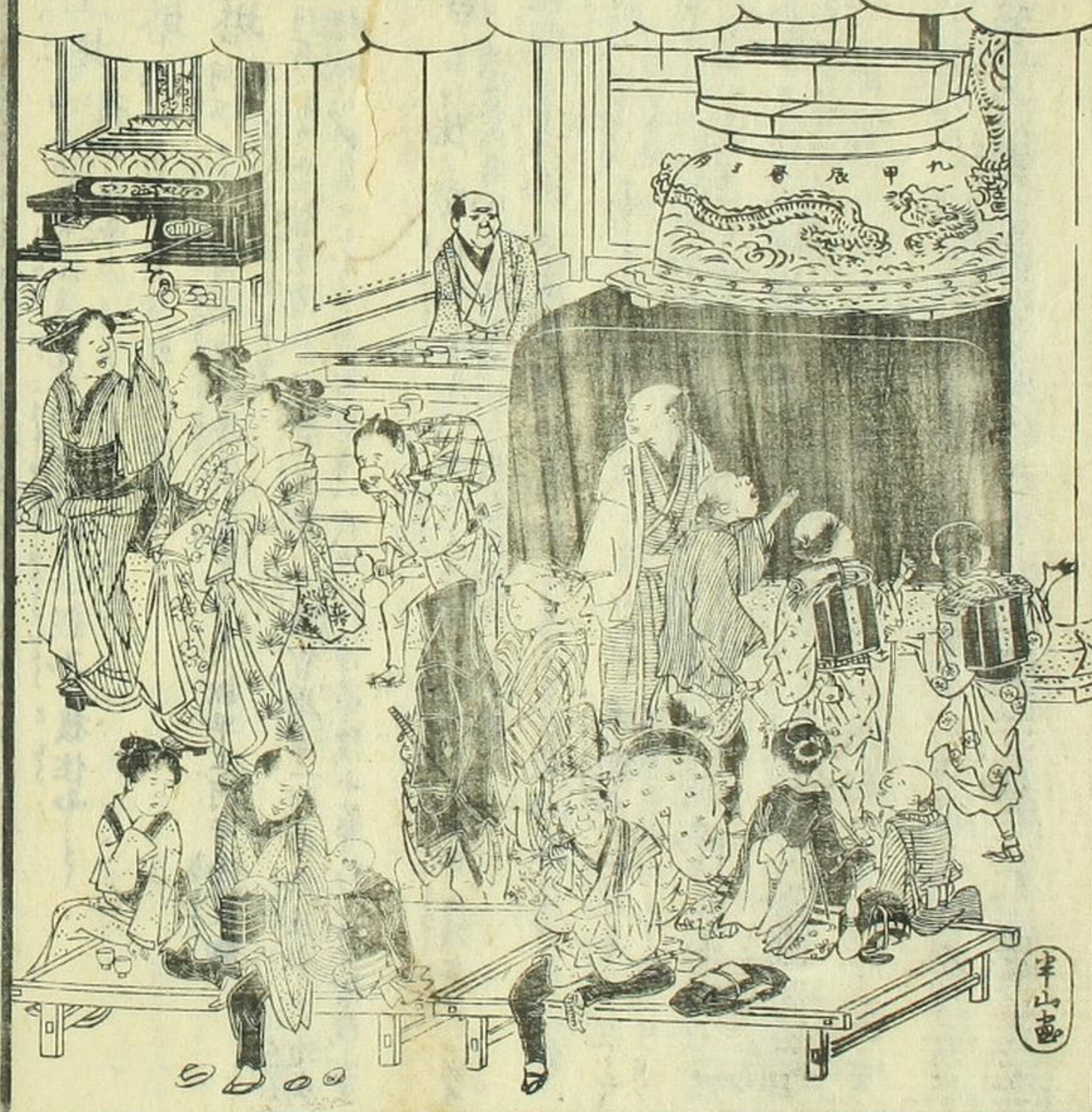
茶亭

浮城の
いづれも
さめく
せん
太田垣
蓮月



知恩院
本堂前
茶所

近年此茶亭と創建
有る結構他の及二所
中前より諸君の輩
龜前より諸君の輩
徳より成る考杖の
番日より更なる例
正月十九日より一七日の
御忌大法會の都下の
婦女子衣裳くく
袴履は半々出さる
朝もともやを往來
光景今も秋葉の紅
はもも作し
如くせんこれ偏
佛法東漸國家太平の
尚溜へん



半山

是皆當山吉水之源より出る所なり四本寺の故也毎歳の開山忌と
御忌と稱し法會とあり是又勅命小依る所論旨御教書より一流
都鄙の僧徒出世上人踰勅許を願ふに至る當山より執奏は是又勅詔
ふたり此地古より大谷と号し土地山嶽や谷境廣莫なり
故大谷寺と号し尤今の如き
御建營の時峻嶺と平垣とあり
抑元祖大師の傳記を鑑み美作國久米南條縮固の産なり父糸押領
使漆時國母秦氏なり子なき事と歎く夫婦諸も小佛神と祈り秦氏
夢小刺刀と飲み覺る則れ妊身なり長兼二年四月七日午刺男子を生む此
時紫雲空ふたは白旗二流降るる館の西なる掠の木小止る鈴鐸四
方ふひき紋彩目小輝き七夜を経る天小登る是より此樹を誕生掠と号く
後小佛閣を建く誕生寺と号し今にあり赤子の字と勢至と号け竹馬
小鞭と打の齡より教智ゆる稍もれ西の壁小向る癖あり九歳や同
國の菩提寺の室小今學問と院主勸學とて人情小兒の量と勘る是凡小

あはれ徒小邊鄙の塵小雜を復と惜る比叡山西塔の北谷持寶坊源光が許か
登り勸學が書翰小曰進上大聖文珠一體なり時久安三年二月十三日洛と
勸學が書と持寶坊小渡り源光を披見く文珠の像と尋ふ小兒の
上洛せし使者申す早く兒の聰明なりと教智せり則十五日小登
山源光試ふ先四教義と授り小藏とあり不審なる疑ふ所皆天台の要論
なり不思議の事と思ひ我淺才なり此を弟子とせん同年四月
八日小兒と相具く功德院の阿闍梨皇圖が許す入室せし皇圖其智の勝れと
聞き驚く曰き夜の夢小満月室小入と覺るが扱小此小逢き前兆なりと悦
喜する同年十月美髪と刺戒檀院す大乗戒と受たり斯く惠解天然
小四教五時の廢立かむを一心三觀の妙理玉次磨所立の義師の教小
起たり阿闍梨感く曰學道ははる大業とげ天台の棟梁とめると寄々
勸めたる是も又名利の學業なりと忽師席と辭く久安六年九月十二日
十八歳や西塔黒谷の慈眼房叡空のものと行く我幼稚より隱遁の志願深き

より演ずれば、女年より出離の心と起す事、是法然道理の聖なりと感
ず。法然房を實名と源光の源と虚空の空と摘ぐ。源空と稱けら
黒谷小磐居を於て出要と求む。心節に、何れの道より生死を離る
るかと山門の經坊々一切經と披見せりと五遍なりとされ。諸の經論小就く
情思惟せり。小彼もかく此も高し。遂に惠心の往生要集并善導大師の釋義
を以て指南とせり。彼釋も亂相の凡夫稱名の行小くも、順次小浄王小生方
べき旨を判せり。藏經披見の度、是と題する事三遍なり。遂に其釋義小一心
專念弥陀名号、行住坐臥不同時節、久近念念捨者、是名正定之業。順彼
佛願、故の文小至す。末世の凡夫、弥陀の名号以念せ、彼佛の願小乘じて
隨小浄土往生を得る。より小伏し、義安五年の春四十三歳なり。餘行を捨專
修念佛小歸入せり。斯く弘教の爲に、叡山の西塔と下つて、洛の西山廣谷小至り
住し。爾後此大谷吉水の地小來り。専ら宗風と弘めり。上人此地小在の時、三坊あり
其地圓山の西あり。吉水中之坊、西山廣谷の庵室を移り、今の經藏の地なり。云々吉水東勢坊
今小方丈の地なり。傳書小大谷の草庵小住し。選擇集を撰む。いづれか所なり。

はる程、上人の宗風、普く海内小弘まり。増々盛かる。より、山門の惡徒、漸
破せん。或、大原と問答あり。是も皆念佛の理小伏せり。建久三年の春、
後鳥羽院の逆鱗、小く四國小左遷せり。元元元年十二月、勅許と
蒙り、歸京し。又此大谷小閉栖し。建暦二年正月廿五日、午の刻、法壽八十才
より、遷化あり。是よりして、例歳正月十九日より一七箇日の間、大法會あり。
勅命小く御忌と稱し、音樂の妙なる聲、聖衆來迎の思ひを、華の
薫り、布金小満り。法筵の中、日小知恩院宮法親王御焼香あり。寺務の大僧正
法親王、末派の衆僧大會の座列を正し、敬礼渴仰の分野、去此不遠の極樂淨
土、是皆大師の厚德顯然なり。謂たり。上人二世の姉妹傳記、當山小あり。所ハ伏見院後、伏見院
遺跡集の講演を御聽聞あり。極感の有り。山門功徳院、善昌法師小勤し。上人行狀の四記を
撰述し。西上皇、後三條院の宸筆、又尊圓法親王并、小世尊寺の良筆、小書り。あまの全編
四十八卷、画圖ハ土佐吉光あり。

法親王門跡當寺御法務の事、東照神君の上奏あり。良純法親王との
權輿あり。又當山廿五代起、巖上人の三河國の産なり。徳川親忠君の七男也。

其初信光明寺住、後小當山小轉住、天文十八年八十一歳中、遷化あり、今茲小安政巳年閏五月十日國師號宣下高顯真宗國師と謚、
東梅宮、尊覺禪橋の地あり、其迎を梅宮町と傳云、所祭城西の梅宮一統の神なり、故小東の梅宮を
明智光秀首塚、梅の宮の傍あり、原黒谷道の東三町あり、あり光秀の顛と、其河小泉せれ
惟任日向守光秀、清和源氏土岐六郎伯耆守頼清の後胤也、美濃國
主土岐大膳大夫頼藝の姉公子なり、濃州明智の里小住に故小明智と
号し、織田信長公仕へ、近州志賀郡坂本の城小居住し、天正三年丹波
國と領し、龜山小在城せり、天正十年、まゝ十七年の間、信長小仕へ、勇忠の
臣たり、天正十年六月二日叛逆し、信長公父子と弑害し、及びびくろが同
十三日山崎の合戦小敗し、江州坂本に落ゆ、途中小栗栖村に旅し、土民の爲小害、
遂小頭と獄門小泉せり、然る小恩顧の者有、以頭と竊小盜と葬り、ものあり、
行年五十五歳、愚因縁云、嗚呼惜しき事也、法号明窓玄智居士、辞世云

逆順無二門 大道徹心源 五十五年夢覺來歸一元

金藏寺 右同所の北の方東側、前條あり、青蓮院御門跡の院内、俗小栗田の庚申と、三猿
本尊地藏菩薩 長三尺許、立像、南向、作詳なり、傳教大師の作、或ハ傳教唐土
常小坊、其像と信、久、與へ給つり、故小米地藏と名づる、と云、
日吉社 地藏堂小隣、山王権現と祀り、朝日天満宮、管神と祀り、地藏堂の
三猿堂 妙見堂の西あり、南向、傳教大師曾、天台の不見不聞不言の三諦と表し、三猿の
形と作る、其ハ兩手と以、兩脚と掩、其ハ兩指と以、兩肘と敷、其ハ兩手と以、
口と閉、俗小見ざる、聞ざる、言ざる、と云、不と様と傳語相同し、且様と申と字義相同し、故小庚申の
日泰諸多、一、三猿の如く、眞の生涯あり、事なり、と云、

虚空藏堂 三猿堂の 蛭子社 三猿堂の西傍あり、東向、座像二尺許、傳教大師作、傳云、此
行所、其像と事、度小おふり、其像と神の崇、あり、と云、止、た、く、其像と、皆夜小入、社小
近、た、く、其像と、社と、其河小、移、其靈感あり、と云、其旧地、今尚、蛭子町と、小、金毘羅堂行者堂
北、小、辨財天社 南の方池の
列、

尊勝院 御嶽堂の南の丘あり、青蓮院御門跡の院内也、天台宗、山門尊勝院の別院、より
御職、代、日野家の猶子たり、又江州多賀の社僧と兼、其地、小、不動院と稱、

本堂 南向、元三大師、座像二尺餘、自作、多賀社、大師堂の傍あり、東向、
白川橋 三條の東、白川の流、小、廣大の石橋あり、白川の水、源、江州志賀郡山中村の溪より
出、白川村に至り、白河と、鹿谷の西と、傳、新載、
白河のたえぬ、法親王覚如



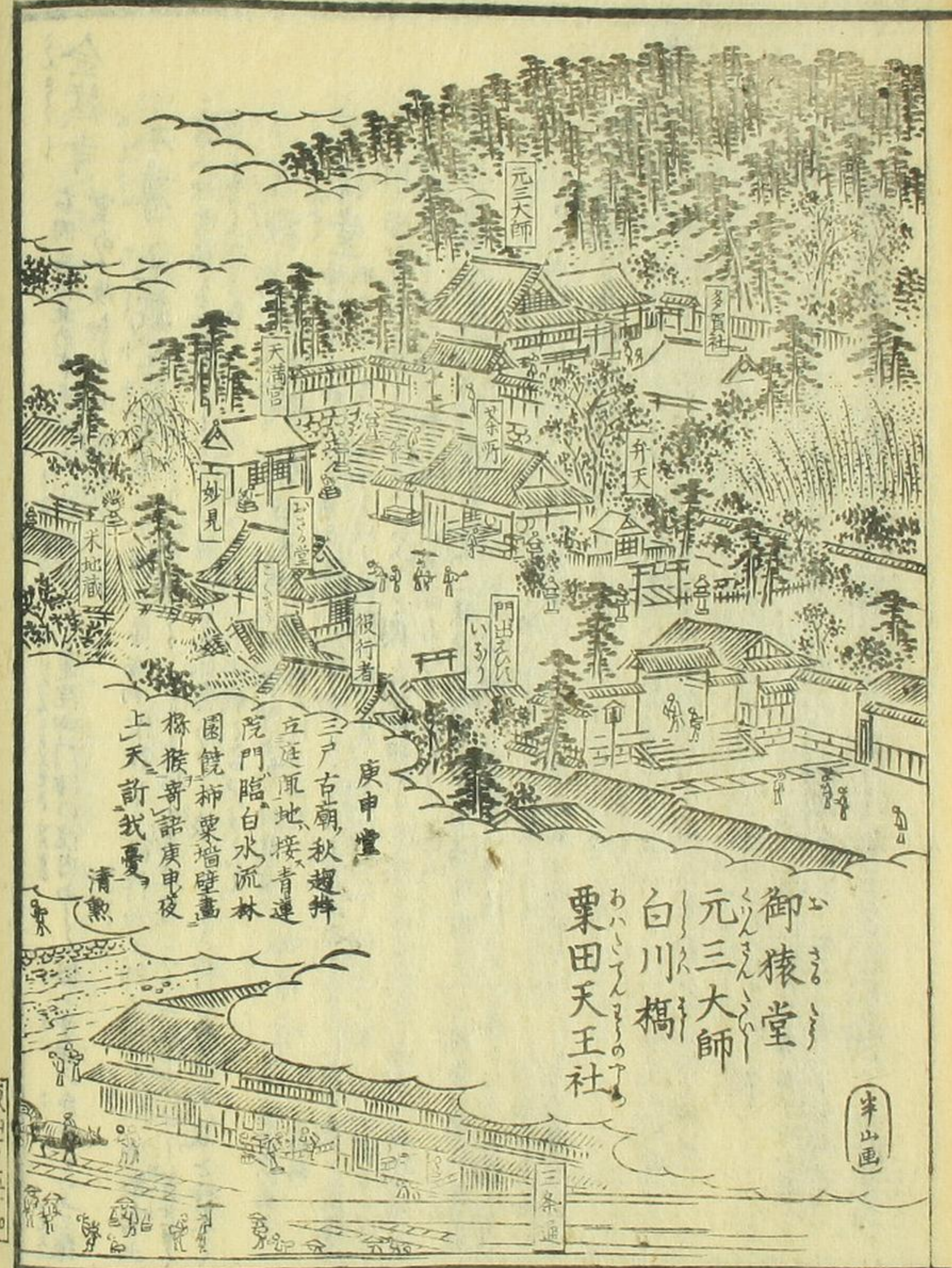
本社

山王

知恩院道

天津海道

流れりや
葉のたぎ
まはる
柳後



元三大師

多賀社

升天

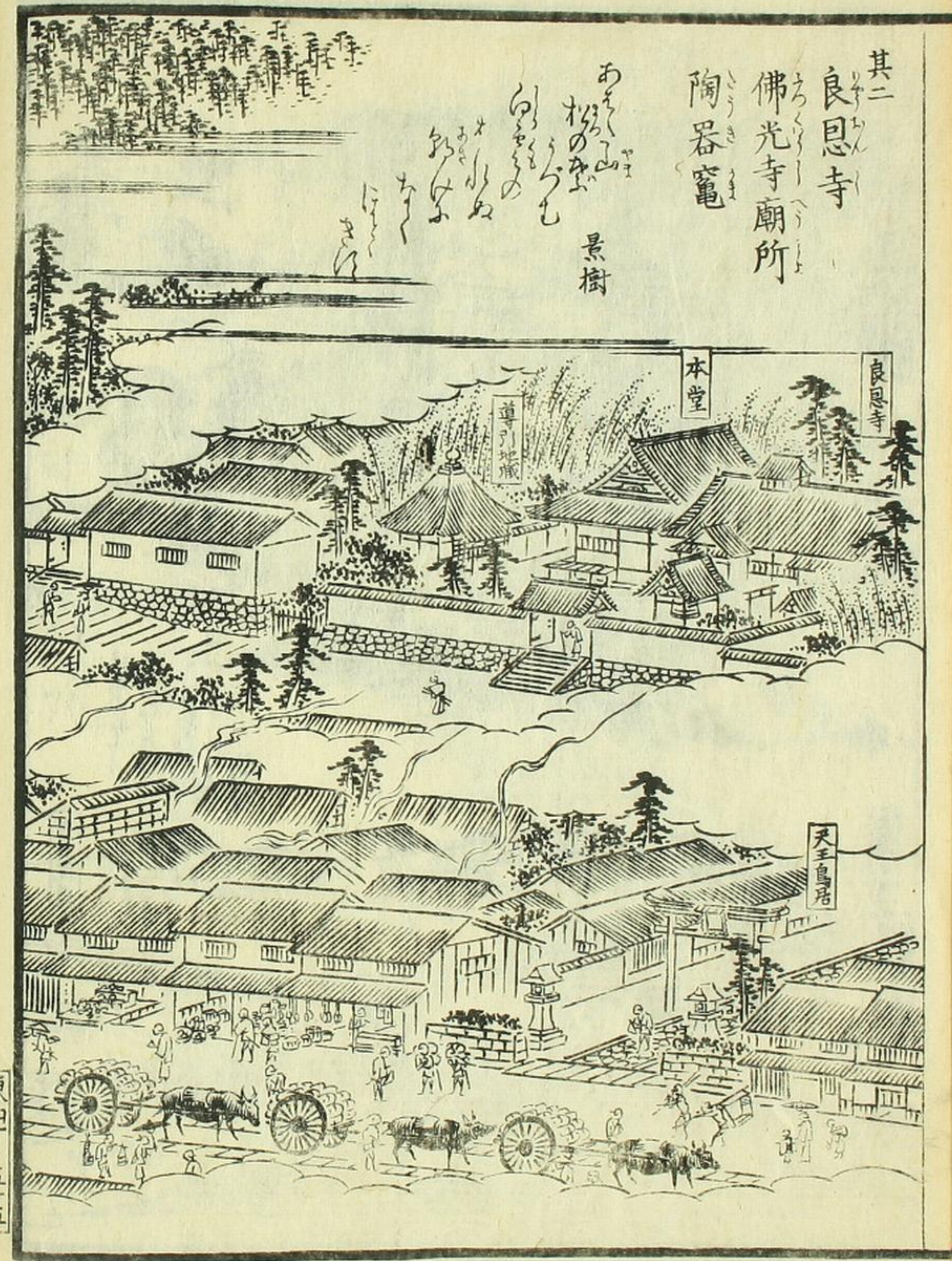
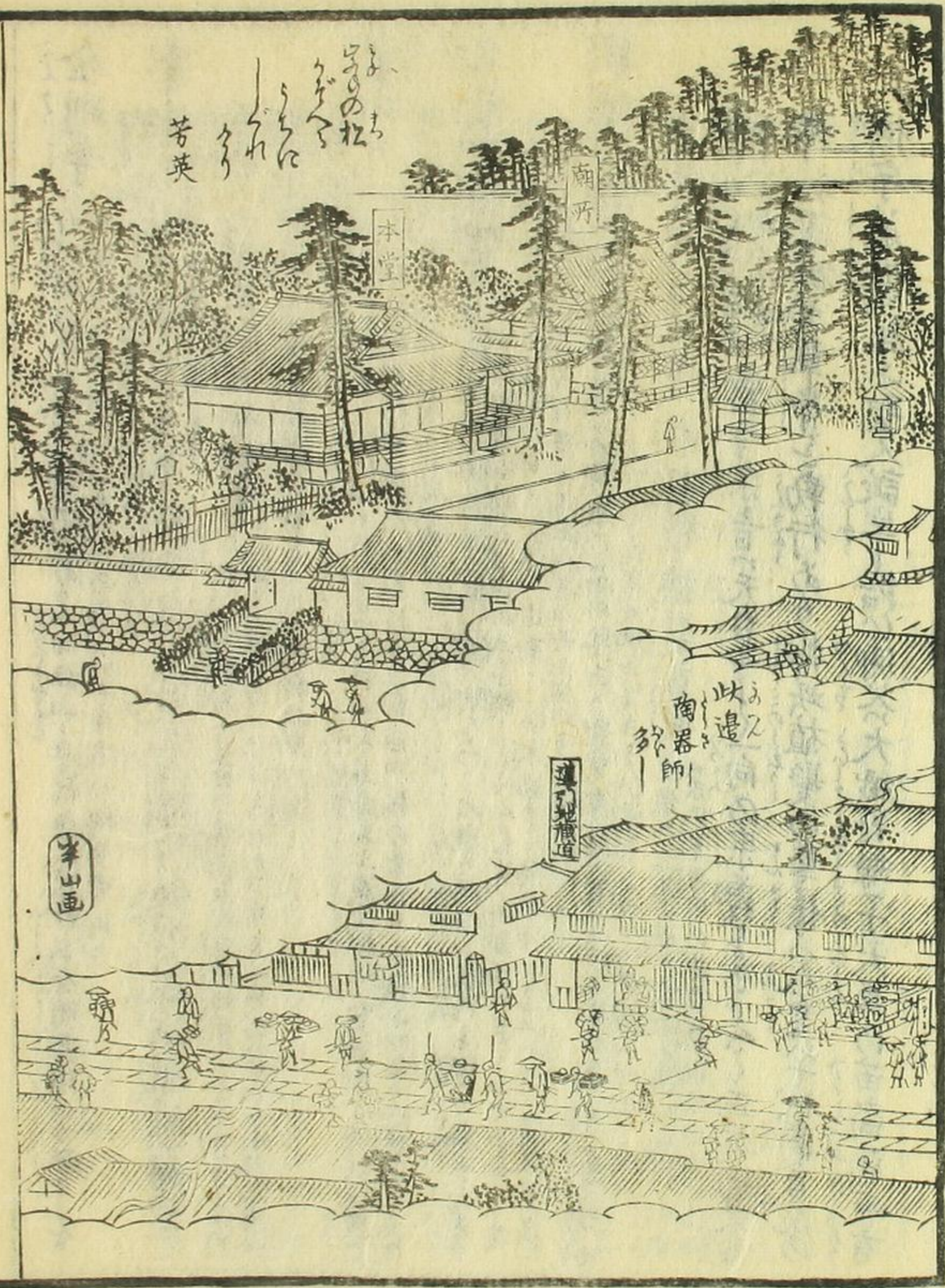
庚申堂

三戸古廟秋廻拜
立庭圃地接青蓮
院門臨白水流林
園饒柿粟増壁畫
椽猴寄詔庚申夜
上天祈我憂

清敷

御猿堂
元三大師
白川橋
栗田天王社

半山画



金剛寺 白川橋の東栗田口の北側あり一切経山と号し浄土宗往古金剛勝院の古趾なり

青蓮院 栗田神領の御門跡 天台山門の座主法親王の御所也始祖傳教大師あり

中興の大僧正行玄和尚あり 以人大織冠十三世の嫡孫京極撰政師実公の息男なり山門

栗田口 郡小属の栗田山宇治郡小属に今三條白川橋の東より山際あり迄栗田口と号す

名産栗田焼 三條通栗田口の古右小陶器師軒とて種々無量小器物を製し店をなす

華頂山植髮堂 三條通栗田御殿門前北の北あり親實聖人植髮の像と安け舊青蓮院御門跡

本尊阿弥陀佛 右殿檀植髮尊像 立像長三尺小麥の植衣を纏ひ梅の御衣

佛和讃御文章等と勒行あり抑此植髮の尊像八人皇八代高倉院の

御宇美安三年小聖人誕生給ひ御父大織冠鎌子大臣の苗裔藤原有

範御と申御母八幡太郎義家嫡子對馬守義親の息女なり聖人幼

年より出離遁世の志願あり九歳の春青蓮院慈鎮和尚の許

わく翠の髮を薙り御弟子となり範實サ納言卿と申々々夫より叡山

無動寺に登り天台止觀を明らめ遂に難行を捨く易行を趣き本願念仏

の一流と弘通給ふ慈鎮和尚聖人の剃髮給ふ御貌と号し一宗の門

か此翠の髮を御頭小植置せし是と植髮の尊影と号し一宗の門

俗偈作日よまゝ 繁昌の靈地とぞありみ々

栗田天王社 青蓮院の東の丘あり鳥居三條通の南側あり感神院新宮の額を掲げ例祭

本社 西向 祭神八王子 或云牛頭天王持世々々小松園東の同小祭る所八王子や三男也

拜殿 鎮守聞王社 并殿の西の傍あり北向 不動堂 本社の傍あり南向中央不動

觀音堂 聖天堂隣り 神輿庫 石階下東の傍あり 御旅所 鳥居の傍あり

鳥居 北向三條通南傍あり石柱額 石燈 鳥居の左右あり正面勸云

感神院新宮青蓮院尊樹法親王筆

長明燈 龍公美の筆

燈爐の軸銘あり 左方、燈平輝々照誕邦畿 伏水龍公美舞撰

當社祭礼例歳九月十日 神輿渡御あり 銀十五本白川の細き橋を渡り小曲持をり
見物の奥を催はと祭礼の例式に就中阿古太系といふあり 蓋是と神室に於ての旗小
威神院御宮の字に栗田宮青蓮院尊證法親王筆なり

諸神記云 栗田口 武將若公本居 天王者四十年已前故二品御勸請也

武家雜記從細川豆州 日行 以使者兼以明後日 栗田口天王祭禮也為

若公様御代官一色式部少輔て被奉御馬御太刀て被遣之如已前

御目錄て被調進之由被作出候云

天文八年六月九日

當社明應年中ト部兼俱卿の勸請乎武將の若公より光源院義輝公より一色式部少輔と
藤長と号し御供衆たり 以上山城名勝志出

小鍛冶宗近宅趾 栗田天王のいり良恩寺の傍にり小鍛冶の水とつる有れそのまゝなり

良恩寺 栗田天王の東あり浄土宗傳云天台宗なり中世浄土宗より故小青蓮院屬に

本尊 阿彌陀佛 淨修長三尺許 引道地藏堂 本堂の前あり地藏尊と安に

一説小當寺の傍辺田地をいひ山林をいひ良恩寺と字をり所多し且

地をり時、金紋の瓦出さる時皆の境内廣大なり成下山跡を華頂山と号し

華頂山 青蓮院の東栗田山の西小なりと云上人云今栗田天王の社の東山の麓に池あり今田地

山腹右の方と岩齋場なり以齋場とめは是より北東の山腹にり近世以所小跡に合此
所をあらたが山と号し藤長年中以彩より其故ハ秀吉公を阿彌陀を奉ふ其其蘇小神
所をあらたが山と号し藤長年中以彩より其故ハ秀吉公を阿彌陀を奉ふ其其蘇小神

或記云寛正六年三月四日將軍義政公花頂山花

見の事あり又太平記小康永元年三月廿日華頂山の五重の塔焼失此

事見えたり前云良恩寺の辺に堀出金紋の瓦を以て華頂山の堂塔の跡をり

將軍塚 華頂山の峯より塚上四つ 若松四五株あり桓武帝の御時平安城久遠なるを以て

梅武相レ攸 年神甲鎮 皇州 鬱彼一止 松 祇園瑜

萬古復千秋 不同白帝子 金人適鑄仇

佛光寺廟所 良恩寺の東あり三條通大路の南側小門前の通條あり東山廟所と稱し寺境

廟堂 西向開祖親鸞聖人畫影 阿彌陀堂 廟所の北に隣り明和年間の

梵曆開祖之碑 阿彌陀堂の前の前あり普門律師の碑あり銘文略之

普門律師諱圓通字阿月希無外子因幡國の人山田某の子なり

首藤刑部俊通墓

刑部俊通、悪源太義平の
勇臣十七騎の其一なり

本朝武將小傳云

平治之役、義平入洛會

義朝與平氏相戰、重盛

率五百騎入待賢門

義平以十七騎

擊走之、重盛再

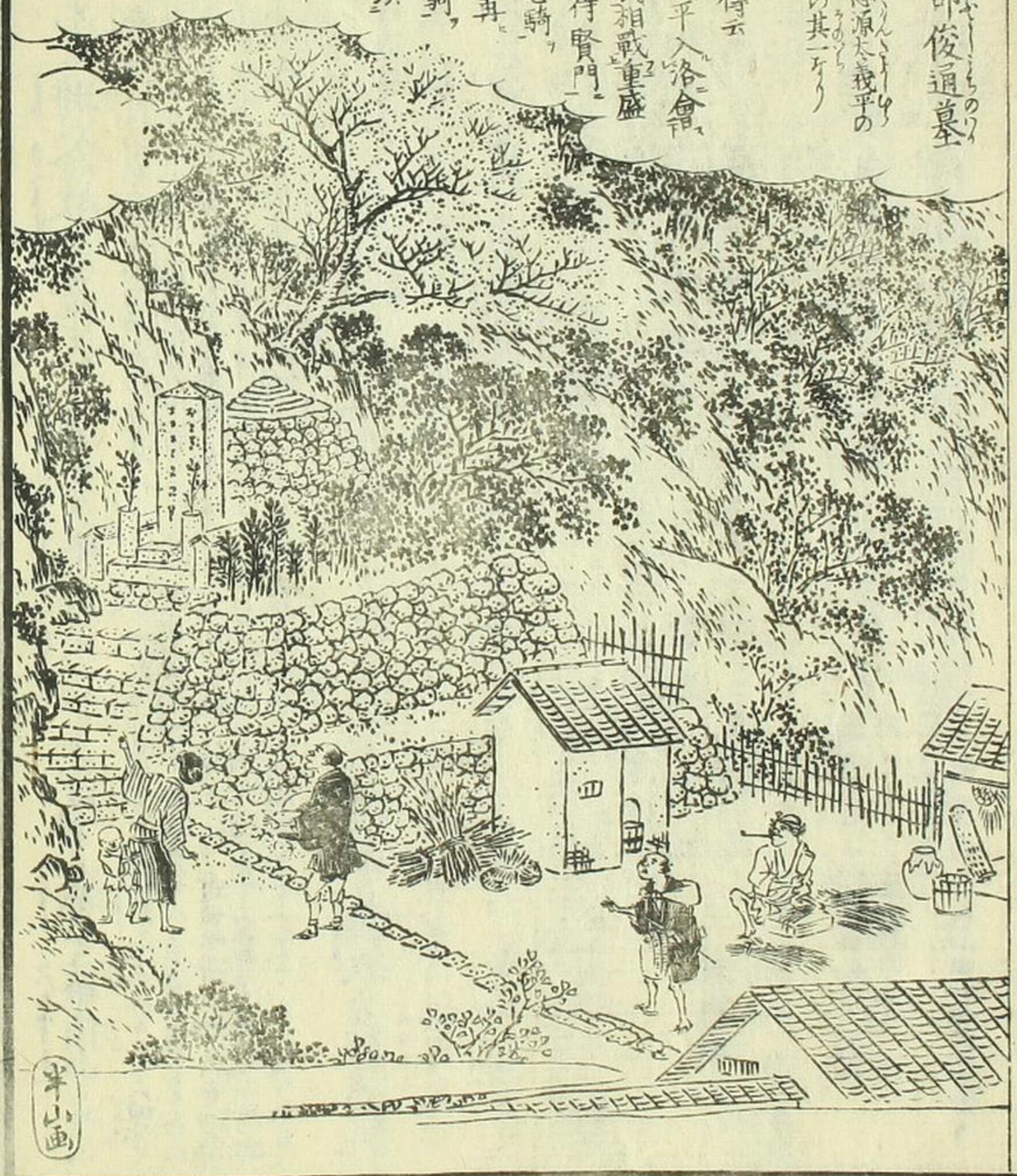
督銳士五百騎

進來、義平又以

十七騎疾戰

破之、重盛殆

危、僅免云



半山画

東山一ノ五十八

七歳より出家し、佛學に達し、且佛国の天文曆象の義に精練し、林曆の道を開闢す。
天保五年九月四日、寂り、年八十一。妻、錦文。小見えたり。
首藤刑部俊通塚 三條通栗田口東分木町、民家の裏山の崖にあり、
長四尺許の石碑と建る。

石面三勸云 白川東南陸、鐵轡驪

鷹脊、麟公、義居此室

同裏云 享保四年、歲次己亥、秋七月二十三日

世孫長州山内、縫殿藤原廣道建

按、小首藤刑部俊通、源氏の勇臣なり。悪源太義朝、十七騎の魁なり。平治元年二月、待賢門六波羅の軍と戦ひ、終つ三條河原の辺に戦ひ、然れ、思願の良等、不以其能と、奪るなり。手平治物語、平治元年十二月二十七日、上畧、續兵小、鎮田兵衛、後藤兵衛、佐々木源三、待賢門の軍の條云

波多野次郎三浦荒次郎須藤刑部長井齊藤別當岡部六弥太猪俣小

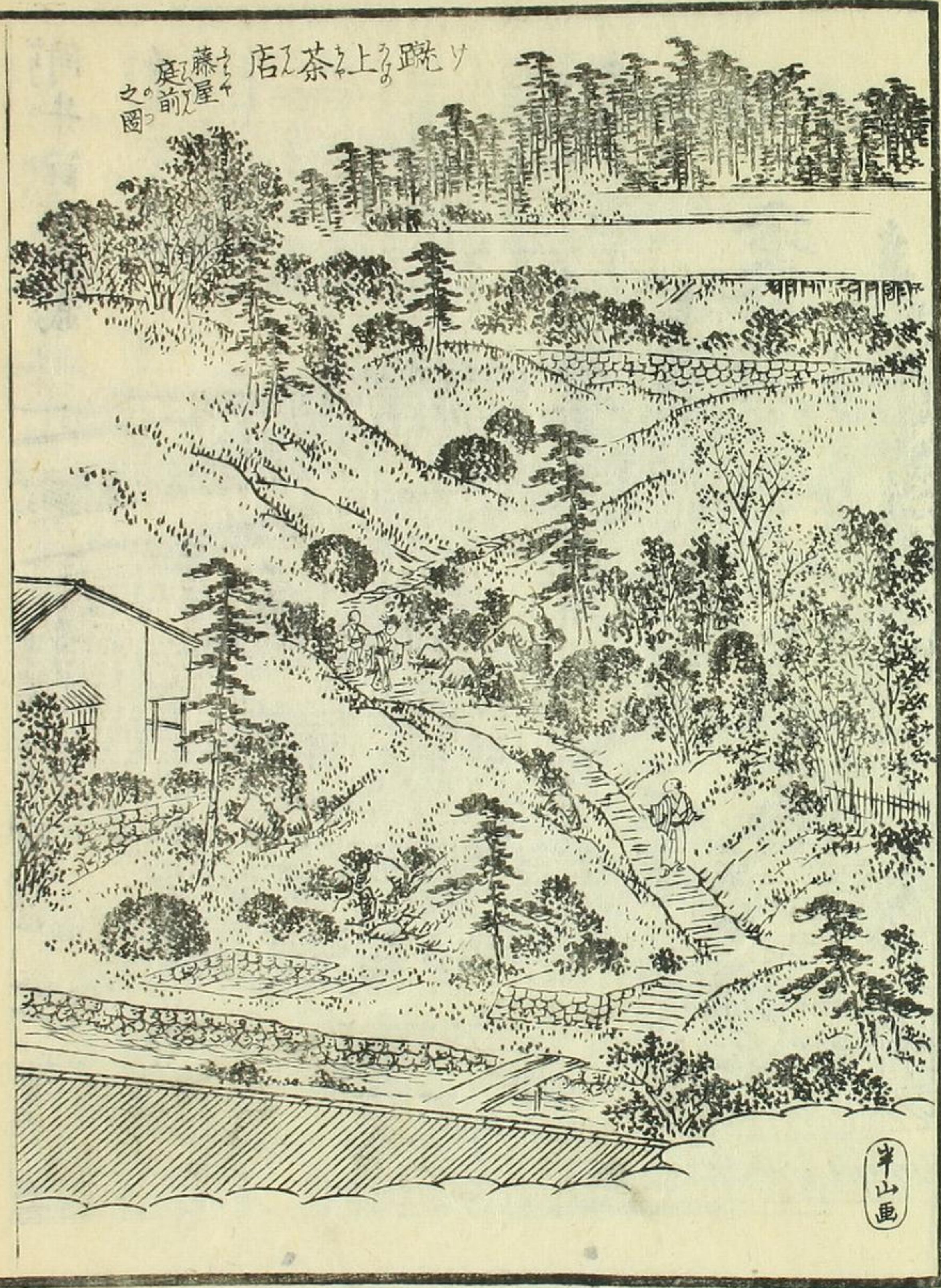
平六熊谷次郎平山武者所金子十郎足立右馬允上総介八郎関次郎行相

小大夫已上十七騎、善を雙々馳向ふ中畧、義朝六波羅の合戦、小打負既、

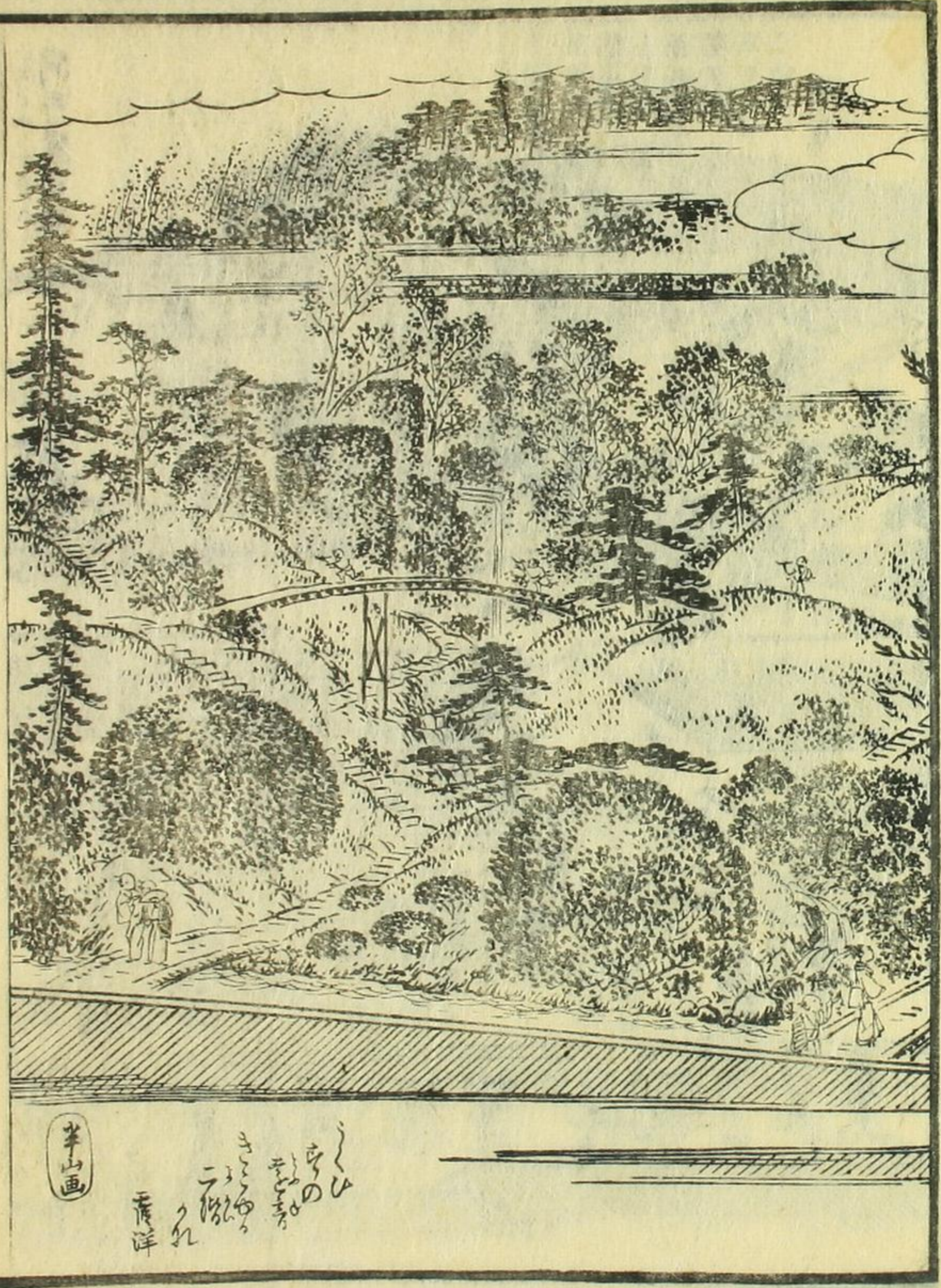
落給、予見え、平家の人々追懸、責を以、三條河原、少く鎌田兵衛申、

頭、悪思召、青河、落させ給、予能、防矢仕、れ、云、平賀四郎、義宣、引、

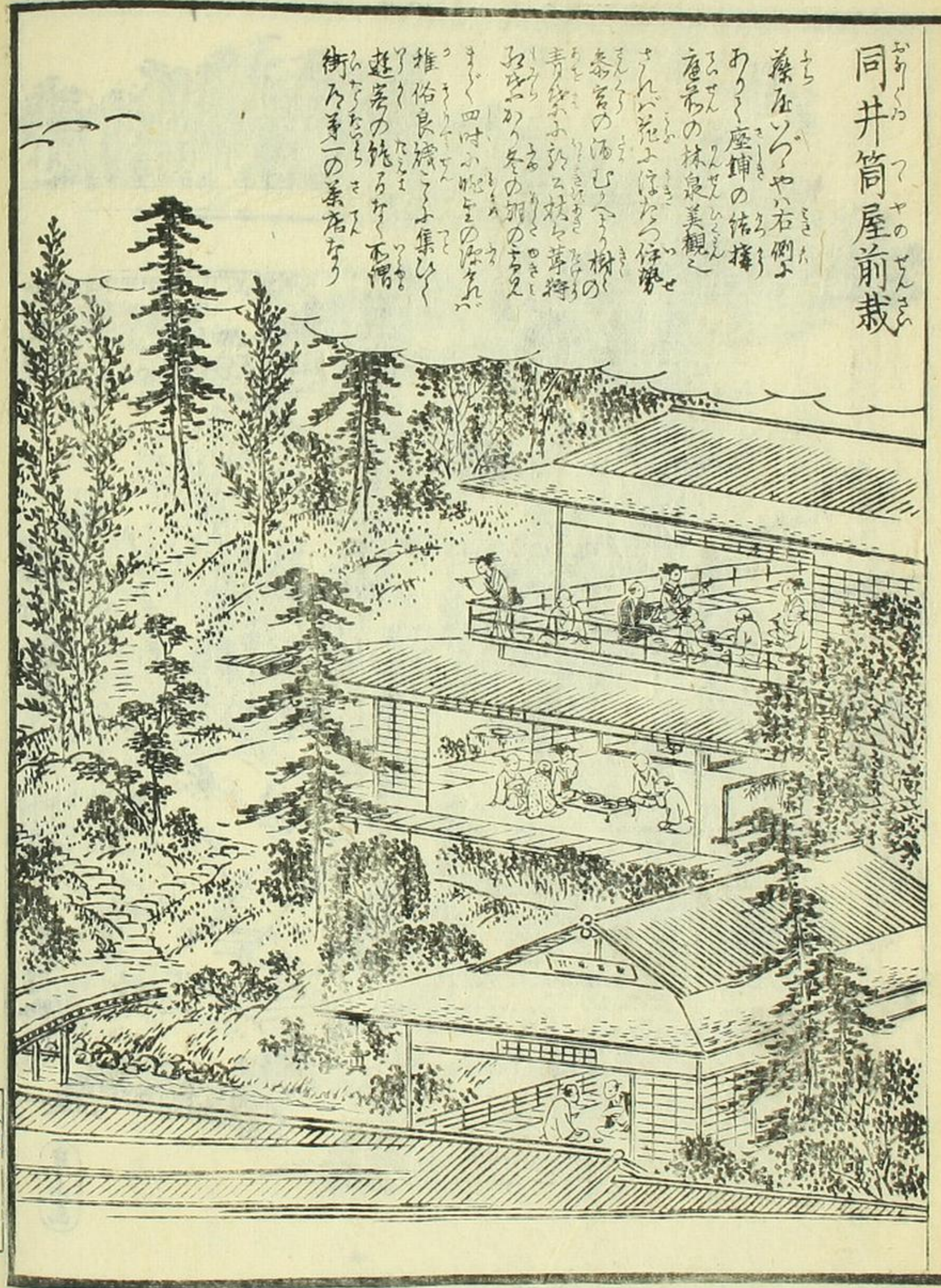
散々、小戦、れ、れ、義朝返、見給、哀源氏、鞭、さ、返、愚、なる者、い、なき物哉



何々々々平賀討と義宣討とを宣旨に依り木源三須藤刑部并澤田と
 始と我も我もと真前小馳塞々防々々木源三義秀敵三騎切落
 我身も手負々々近江國とゆ々落々々須藤刑部俊通と六條河原と
 口共討死せんと進々と留給が爰敵三騎討つ終討れ々々々々
 雍州府志云須藤藤刑部俊通墓在東三條白河橋東南青蓮院境内人家
 後蘭斯人平治元年於六條河原與源義朝相戦而死遺骸葬斯處
 比丘尾坂 栗田神明山より西河大路の小坂と云々此地小比丘住々往來の人小勸進
 故小名とせり後世建仁寺町松原の南と云々此小名の存
 蹴上茶店 日神明の湯居前あり蹴上の水の名小と云々地名を蹴上と云街道の左右茶店建
 此地京師三條通白河橋より栗田大路を經大津の驛小なる官道中
 四時とも小旅客往返間断なく吾妻よりの上下あり送迎ひ伊勢茶宮の坂
 迎ひ々々別々賑々々此茶店小集ひ酒筵を催歌ふり舞り或
 留別餞別の詩歌を送るも多々々餞別々々花の山歌とむ人や踊る人
 と云々句の如く雅俗混々盛なる事言も盡が々々



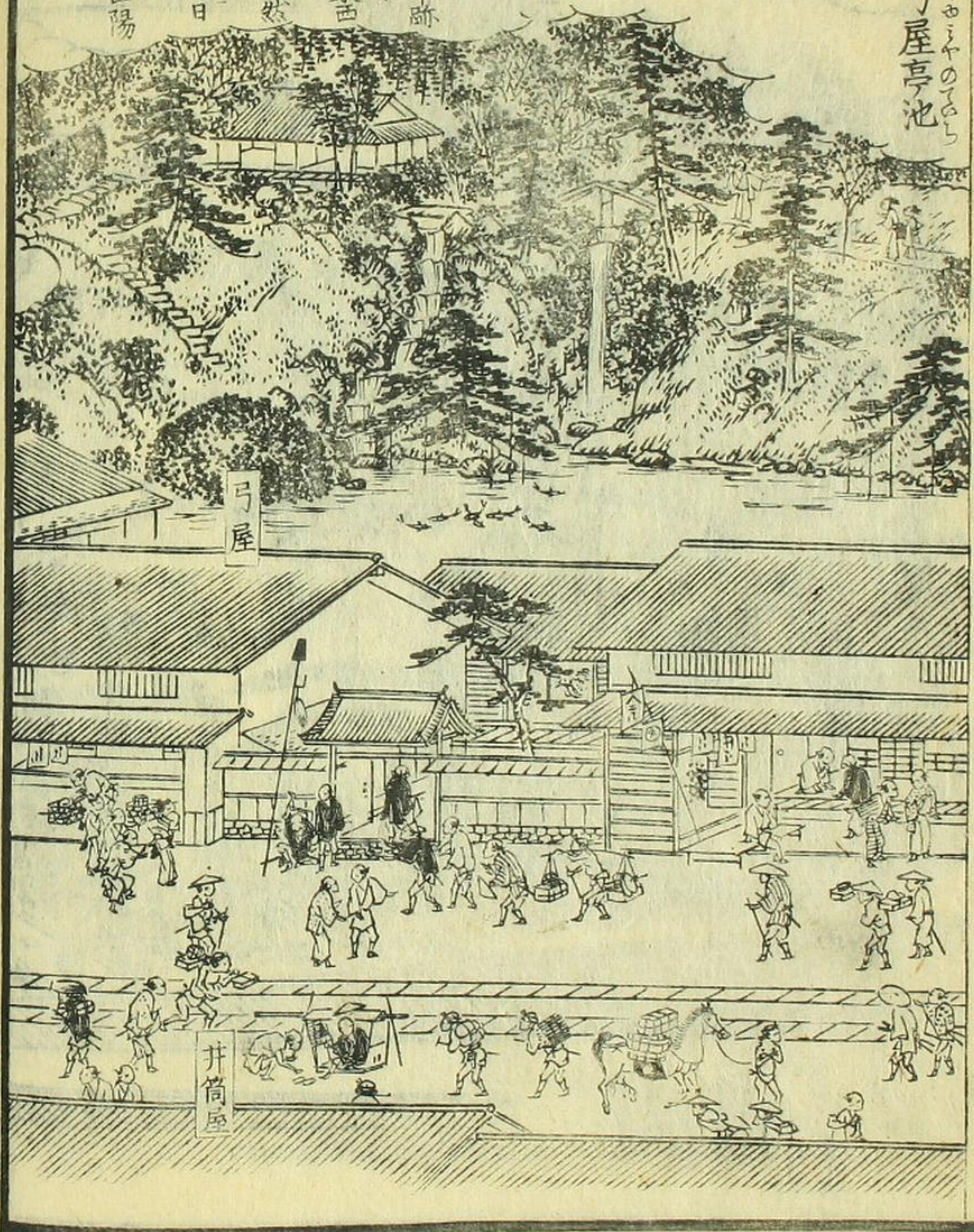
半山画
 青洋
 二階
 三階
 四階
 五階
 六階
 七階
 八階
 九階
 十階



同井筒屋前栽
 藤屋のやうな右側よ
 りて座鋪の結構
 庭木の林泉美観
 さし花よはなる仔細
 茶室の酒むす樹の
 青葉ふりたる枝は草持
 おもひの冬の羽のまき
 まく四時ふゆの海を
 堆俗良機こよ集ひ
 遊客の饒るなく不備
 街乃寺一の茶店なり

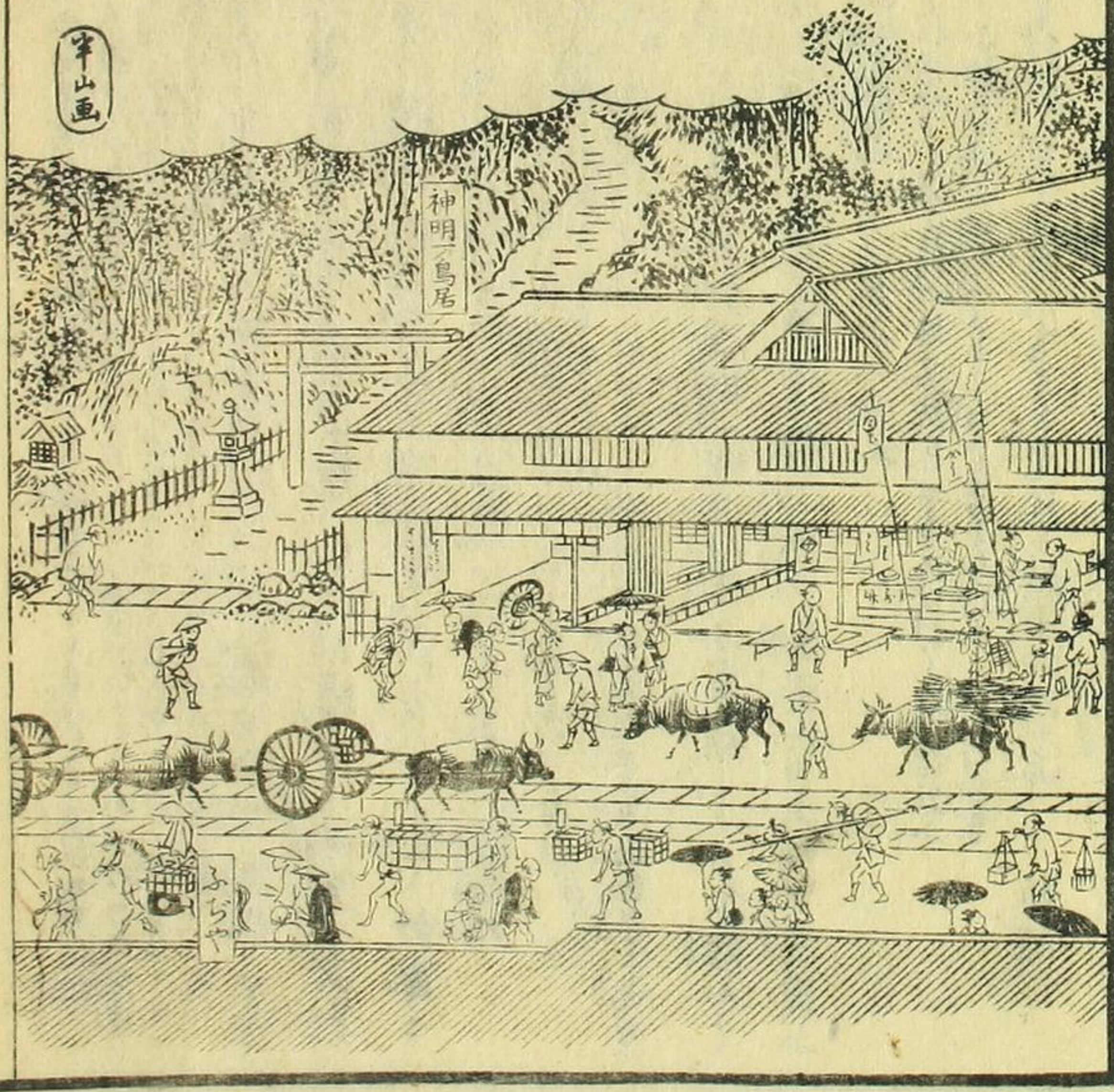
同弓屋亭池

牛蹄車跡
路泥深
柴穀東西
各作林
獨酌悠然
閑來往
馬周今日
已灰心
頼山陽



弓屋左側あり
諸侯小休の陣
さうは上下の構ひ
二流の瀑布を
長大の徑とす
耽りおぼし
古の松樹あり
奴才をよき
陸奥ひま
今に至る
花宮不其
太平の市恩澤

半山画

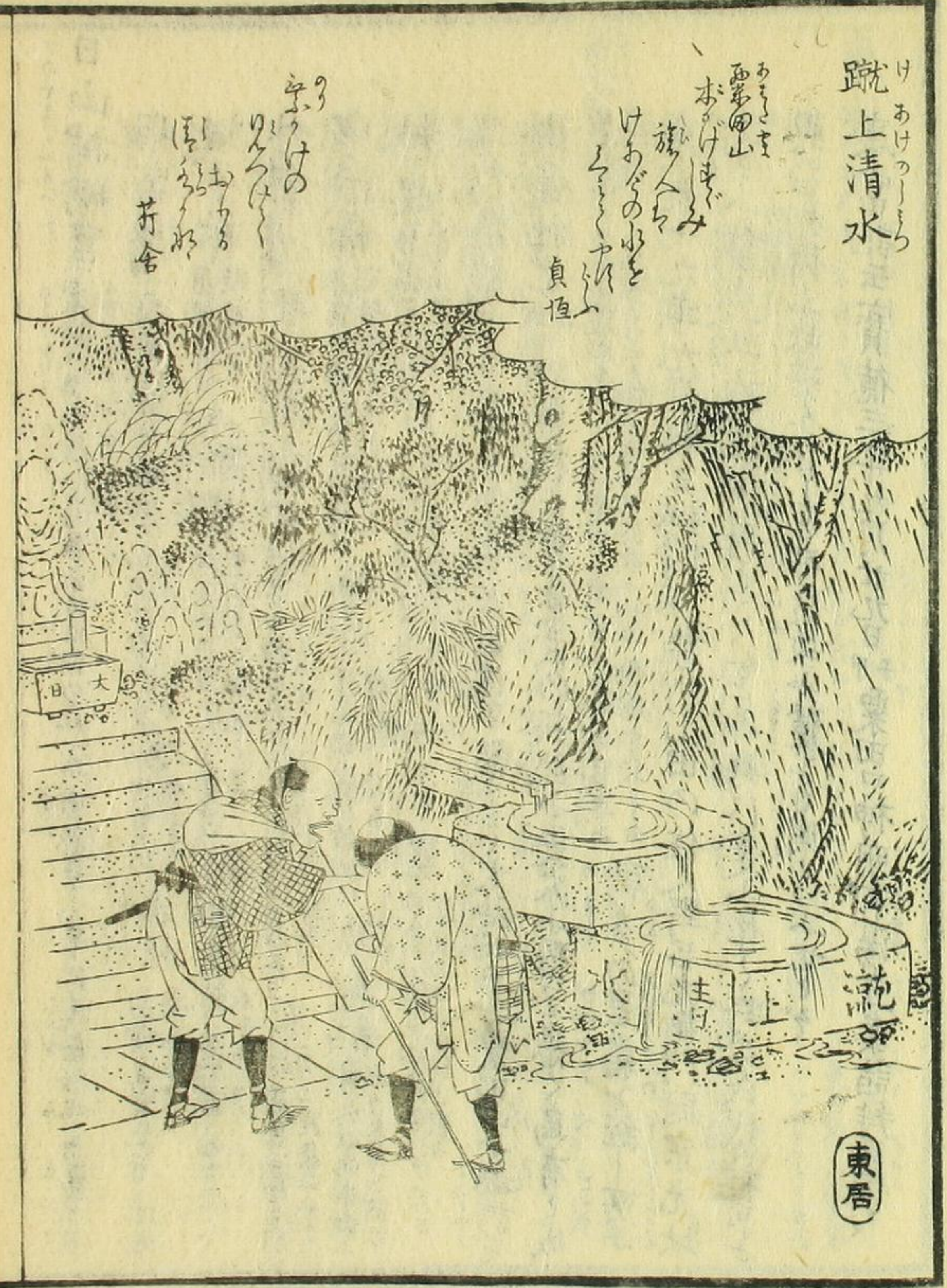


蹴上清水

栗田口神明の鳥井前の東三町新崖下あり清泉や甘味たり傳云此地と蹴上と
市とつもの牛若丸と火年とつもの馬をもちり地上の溜水を馬の蹄をかき蹴上けり
牛若丸大つもの子市とつもの馬をもちり地上の溜水を馬の蹄をかき蹴上けり
異本義經記云安元三年初秋の頃美濃國の住人関原與市重治と云者
在京したり私用の事ありて江州小赴きたり山階の邊ゆく御曹司小行
逢ふ重治の馬上なり折節雨の後ゆく蹄蹟水の有りと蹴上け奉る
義經其無禮とむめく鬨争お及び重治終小討と家人の逃去ぬ
安養寺 右同所大日山道の傍あり常行念佛の旧跡と云浄土宗青龍山と号す
一切經谷 右同所の谷と云一切經の別所あり一所ちりて百練抄盛衰記平家物語平戸記等
出たりまて小畧

明月記云嘉祿二年六月三日忠弘法師一昨日吉小泰詣々夕小臨ん
飯乗云々湖水溢而人通小路と通ず雖山階の細流皆大河と為渡ふ
及び山を披く一切經谷より京小入云
續草叢書 お房かかれせむしは後六條中納言世とのがれ一切經谷小
住むはつら小神世月のにたつひりりる香ふみけりお庭落葉
庭の面はこれ木葉を清ひきくをば子孫小山風を吹

蹴上清水



西栗田山
おのけし
旅人の
けあがの水と
貞恒
蹴上清水
おのけの
おのけの
井舎

日山神明宮 栗田大路の傍小鳥居あり日向の社一小朝日宮とも号し鎮座の地と惠比須

内宮 東向 天照皇大神宮 山の半腹にあり 別宮 内宮の傍あり 末社 南傍五座北傍三座

蛭子社 南傍にあり 八股杉 蛭子社の前より大木の影あり 影向石 神杉の傍にあり

外宮 東向 豊受皇大神宮 内宮の前細流の 別宮 外宮の南傍にあり 末社 南傍三座北傍

宇治橋 外宮の後の流に渡り 神水 宇治橋の北の傍にあり 神馬舎 神水の向南側

拜殿 外宮の 鳥居 石階の上より日向宮の額と云 岩窟 内宮の南の山上にあり

三代實錄曰清和天皇菅原船津小詔々々大神宮と栗田山小勸請

則是社也 雍州府志 爾後元亨建武の兵乱小災火小罹悉く鳥有と成

或云應仁の乱小焼七も又建武の順當社の官司官軍小 許多の星霜と經一所小

慶長十九年九月朔日 或云寛永年中 勢州山田の住人野呂九衛門尉宗光此

山下小塾一旦神託を得てこれを再興は是小依て野呂氏代社司と

勤む相傳ふ此所を日山と号し故小麓と日岡といふ也とぞ

康富記云寶徳三年九月廿九日甲栗田口神明有湯立奉詣拜見了

東岩倉山 神明宮の上あり 勢河ハ往昔玉城の四方の山小大乗經と載て帝土の鎮護

郡小あり西ハ訓郡小あり南ハ松原通敷屋町の角小あり石不動古跡なりといふとぞ

一説小豊臣秀吉公此東岩倉の山上小樓と宮と是より洛陽と眺望

給ふとぞ實小此峯ハ洛中唯一望小あり絶景の勝地なり

東岩藏寺真性院 右同所あり 勢河ハ往昔玉城の四方の山小大乗經と載て帝土の鎮護

觀音堂 山の半腹にあり 十一面尊と安んず 大日堂 山の絶頂にあり 大日如来と安置

稻荷叢祠 大日堂の前小鳥居となく 玉垣と圍り小殿あり 藥師堂跡 同下壇平地の地にあり

行基座禪石 同所あり 不動瀧 同所の下あり 瀧の傍小不動堂あり毎年六月廿八日

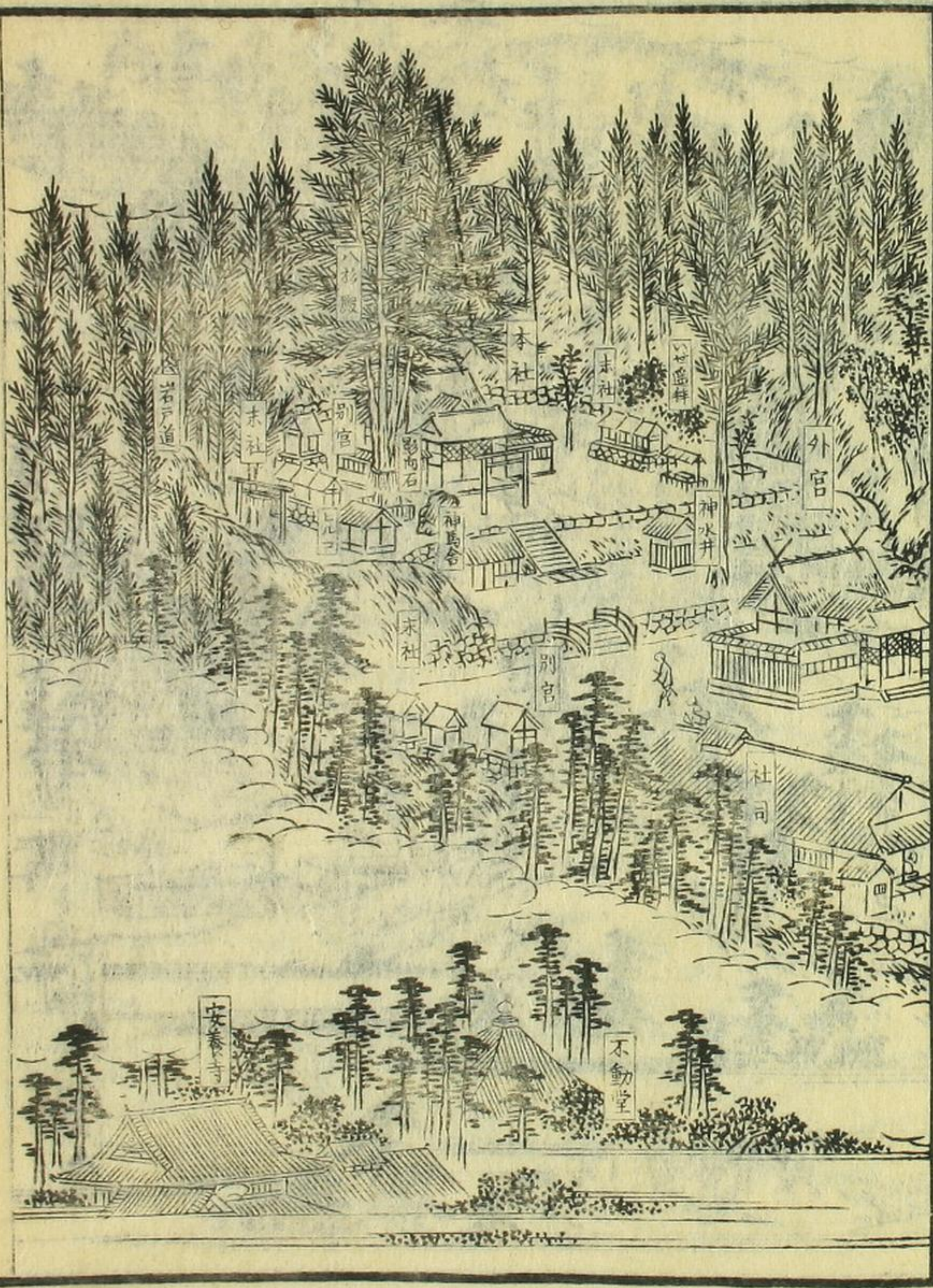
當山上小大日堂あるを以て世小大日山と稱し 安井御門跡の 山嶺より花洛

一圓小眺望絶景といふたぞ 殊小山中小櫻紅葉多く岩根の躡躅

ひよりの美觀なり 尚晩秋の頃の花落の良賤茸狩と催し山路の茶店小

竹筒破子ちよ聞き松毬と焚く葦と焼酒肴とわく杯とめぐるに飯

を忘るも最多り且近來山中小三十三所の觀音の小堂と彼岐小建立

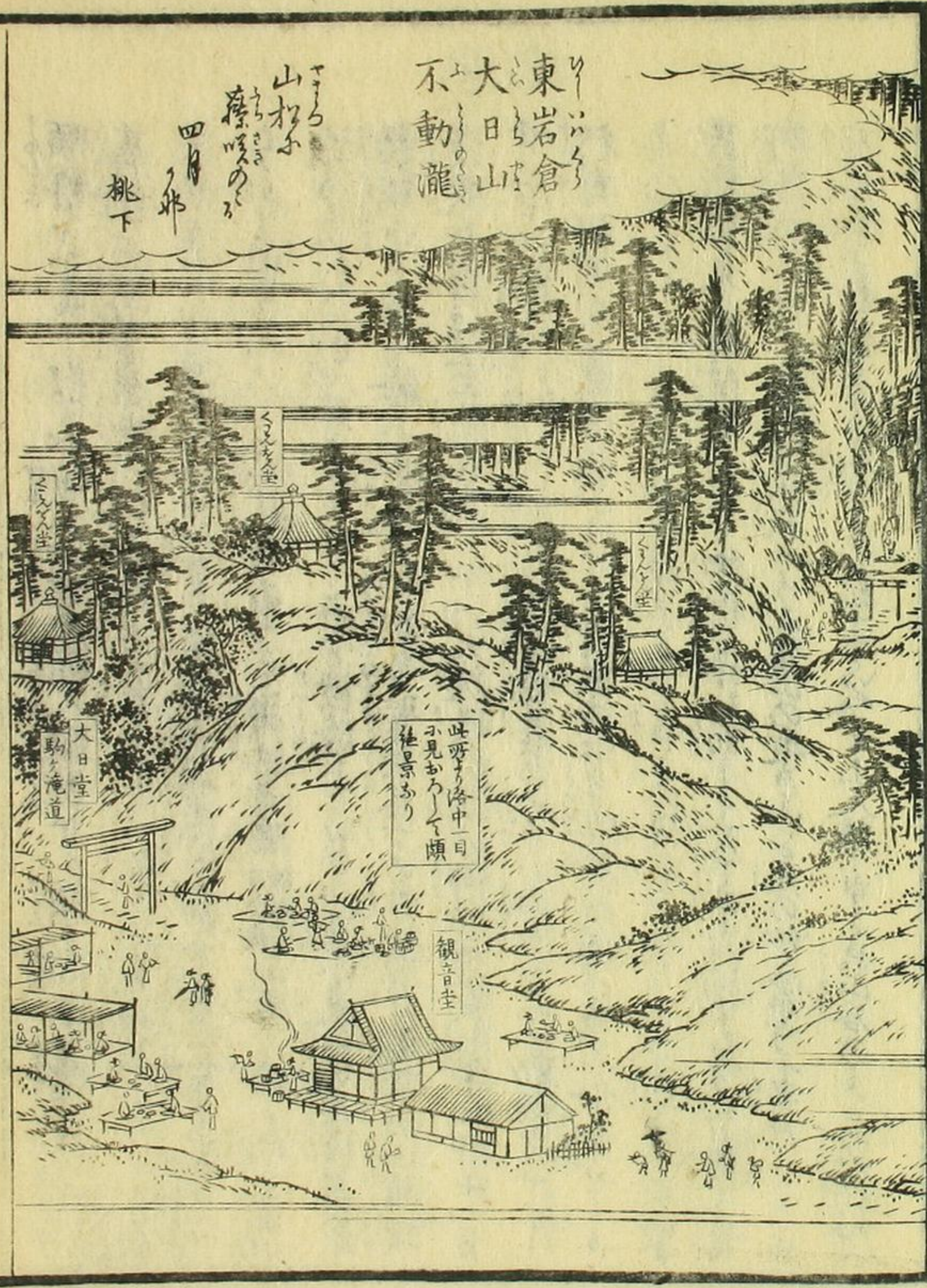


ひのちしんめいのみや
日山神明宮

神廟巍々聳
碧霄瑞雲路
涉赤欄橋雄
規再復貞觀
舊靈鎖千年
福聖朝
原龍辨



山山画



東岩倉
 大日山
 不動瀧
 山初ふ
 四月
 桃下

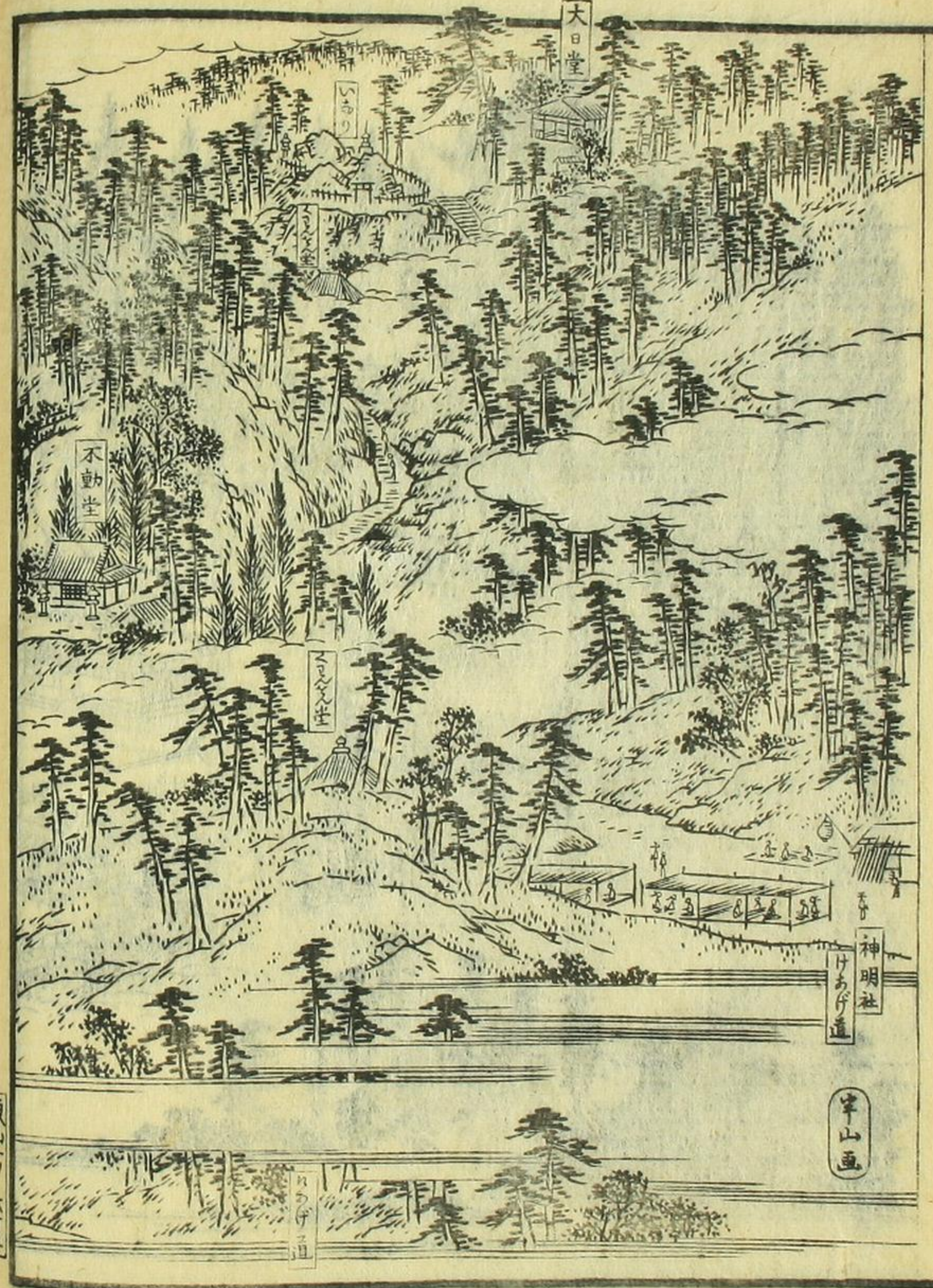
此野中
 不見
 法景あり

観音堂

大日堂

大日堂

大日堂



大日堂

不動堂

大日堂

神明社

半山画

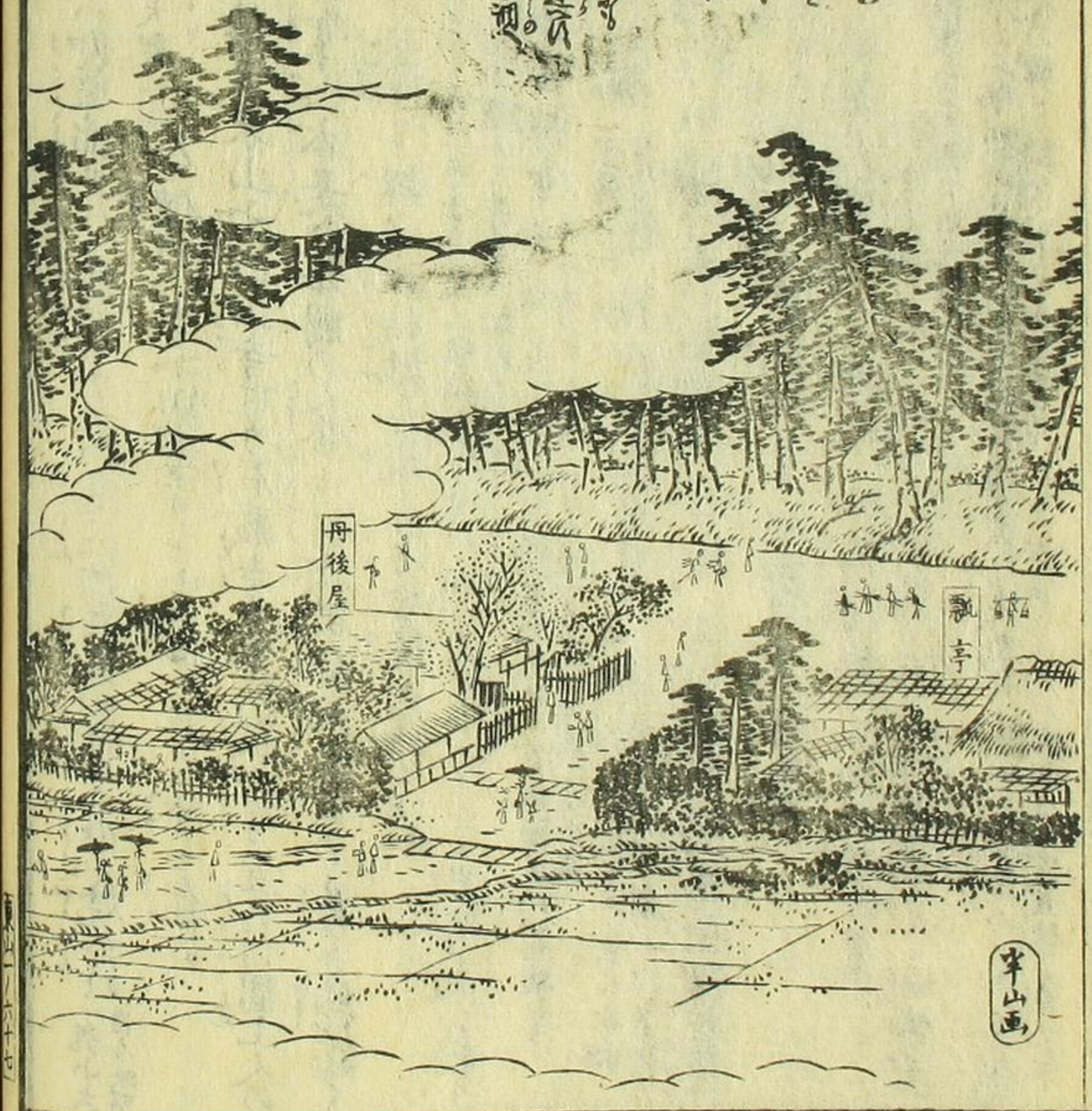
東山ノ六

順拜と云ふは故四時の諸人間断なく頗る賑ひを増す
舊記云東岩倉寺は行基僧正の草創なり然るに荒廢年久しく後
文永五年戊辰九月の頃東山光堂光明院中興大圓上人爰に住居せ
らけ時龜山の上皇脱履ありて禪林寺殿今の南小居給ふ則ち當山
近き代以て時々臨幸ありて上人と清談ありて遂に東岩倉寺と以て
勅願寺と爲り給ふ本尊は聖觀音聖德太子の作鎮守は妙理白山権現
清瀧熊野以上三所権現と号し又後嵯峨院の御宇建長七年乙卯十二月
廿二日法勝寺下岡時の阿弥陀堂供養の次手小臨幸ありて勅願寺と
行有阿闍梨と權律師小任せり其後後宇多院御祈禱の事上人小命せり
上人即御門御等身の愛深明王と造り長日の護摩と初めり又弘安四年辛巳
異賊襲來の時院宣と夢り御祈と始む而して天下平に治り又龜山の上皇
御落飾の後上人小御受戒あり又當山の近き山と元の如く當寺小寄せり由
有房卿と勅使と仰下り然るに上人辭申し只山谷のと受領はと

云々其頂の如藍溜たる佛刹なりが應仁の兵火に罹り悉く焼亡に
一時小焼亡にせり今僅の小堂小觀世音を安置其古跡と存り
後拾遺往生傳云東山小の山寺は石藏寺と号し彼山寺は行圓上人の
建立也件の聖人は本是大和國の人修行の次彼仙洞に至りて菴を結び始
住に漸く四十餘年と經り松柏林と成り房舎院小満と云
藤木越 東岩倉山より三井寺を通り坂路なり應仁記云南禪寺の上より岩蔵小陣と取
瑞龍山太平興國南禪寺 東三條の北にあり栗田植髮堂の北の方南禪寺門前通より
佛殿 西向 釋迦佛 坐像二尺 脇士 文殊菩薩 右 普賢菩薩 共長尺余 獅
金剛力士 立像二尺 以上厨子安け 脇檀 南方 中央 祠山大帝 大権修理菩薩
右 護法明王 腰と椅子懸り長 龜山法皇宸牌 已上南檀也
同脇壇 北方 達摩大師 百丈禪師 臨濟禪師 三像共椅子坐け
佛殿は三重屋の額堂華堂と書し堅額也三重の間に掲る妙所舊法堂あり同棟の後
佛殿と以て兼用と古殿の地以前あり
山門 五鳳樓の佛殿の前より寛永四年藤堂高虎爰再建大板出陣のとき從者
女せし徳の牌と閣上にお安し菩提と吊り其始安しり所ハ教迎金泥の五像 寛元帝

南禅寺總門外
松林茶店

丹後産の湯豆腐は古より
名物なり。板入の湯豆腐
は、味噌の香りと、豆腐の
滑らかなるを、老練の
近世の奇製なり。酒肴
の妙なり。これと合せて夫
豆腐の茄子等の木松等
は、四時とも風味を違へ
彼方ゆへに、後を遺す
所謂精物の膳なり。又
雑印の香の松林の
みずみずしく、河海の
志は、松林の香を引
き、骨髄と健ち
腹の生地の最上なり。一
宴や方丈の湯の味は
これに、松林の料理の



半山画

梅若君男女の
けりめちりて、松林の
毛人ぬねの、今も
よ代けりて、古今の名
あるの、松林の、
花港の一寺と

三ノ



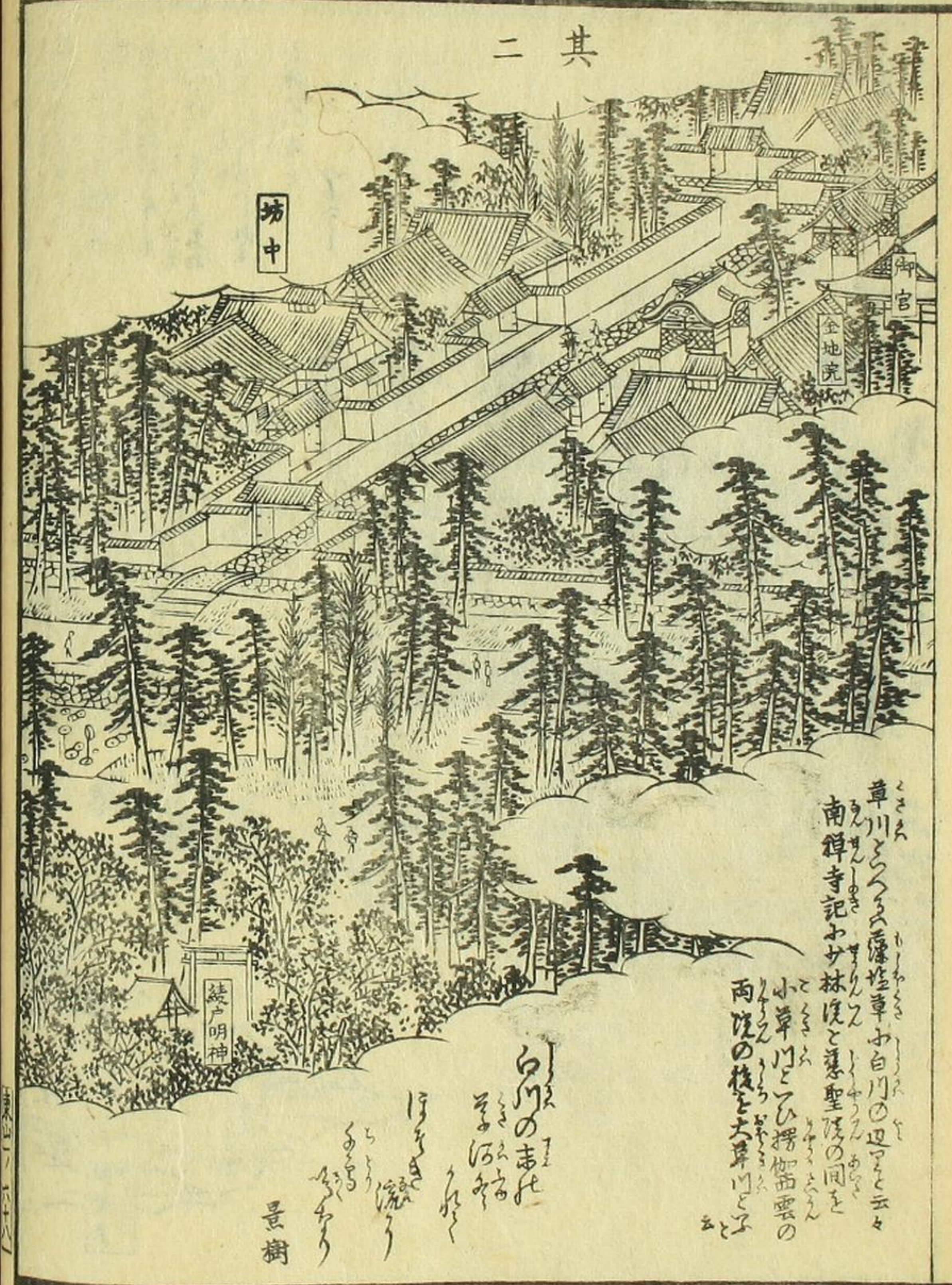
松林の
小
寺舎

永観堂君
王子と



春晚花過客至
會南神仙館
春在青山九鎖
中京塵稅駕
向詩翁花應
羞引世人
至万綠樹
頭昨夜風
彦菴

半山画



其二

坊中

草川とくらの源は草小白川の辺と云々
南禅寺記に少林院と慈聖院の同を
小草川といひ標御雲の
両院の傍と大草川といふ
云々

白川の末に
少林院
慈聖院
標御雲
両院の傍
大草川
云々
景樹



羊山画



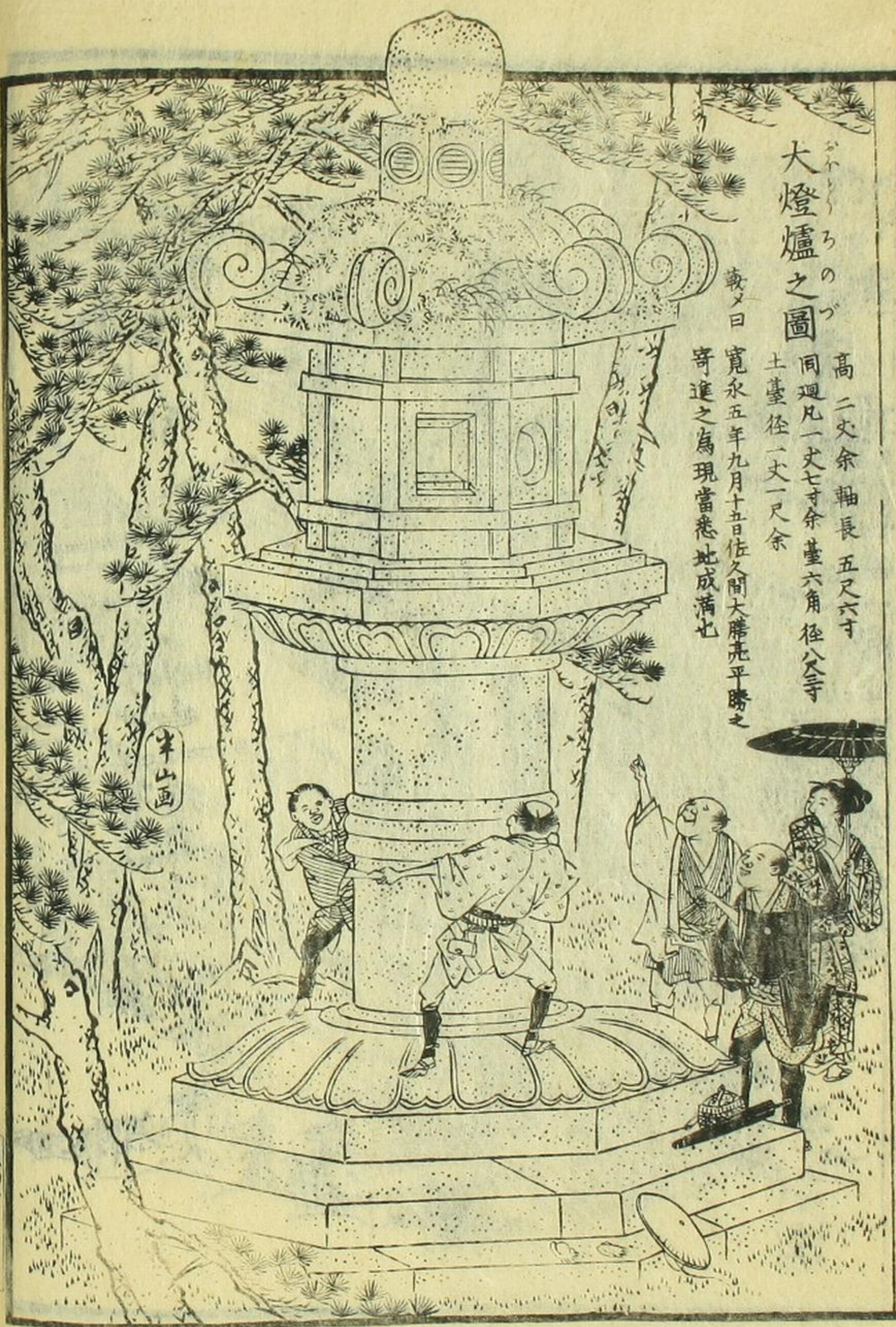
其三

遊南禪寺中
 聽松院
 遮斷塵緣無絡心
 松風撥竹似彈琴
 門前飛閣高千尺
 不及山房禪味深
 新官碩

東山一六九

大燈爐之圖

高二丈余軸長五尺六寸
 同埋凡一丈七寸余蓋六角徑八寸
 土臺徑一丈一尺余
 義ノ曰 寛永五年九月十五日佐久間大膳亮平勝之
 寄進之爲現當慈地成滿也



等身の御影寺
 寛元帝ハ後醍醐院の事
 國花鳥等の古法眼元信の筆中の同止四孝ハ狩野永徳西の間花鳥同筆なり三の間の
 画の水のハ此虎ハ狩野探法印の筆也其名曲小高

方丈 佛殿の東ふあを毘盧頂と号し
 乾峯和尚扁と掲

龍淵室 同方丈の書院
 東の間鳴滝の

簷葡萄林 本堂の北傍ふあり
 衆寮と号す

座禪堂 簷葡萄林の
 東小隣

景烈祠 同東小隣
 額雪峯筆

南禪院 佛殿の南ふあり亀山法皇の
 離宮の跡なり

中央亀山法皇宸影 表殿云先功德主 亀山太
 上 覺皇前阻嘉元三年九月昔

南禪院御陵 前同所の庭続き山林中ふあり東西六間南北七間此所ハ御收骨の
 多宝塔あり跡ハ今ハ御印の木に見ゆ正面ハ石燈籠二基あり

南禪寺記云太上天皇亀山院弘安年中置離宮於此地
 有ニ宮今大雲本房旧地
 西面馬次有紫檀御所
 南面馬次中坊也云

東嶺曰羊角有鐘樓曰天銘故管相公銘鐘也嶺之東乃文應之
 帝祠也 禪林寺殿又
 帝堂以其在禪林寺之南顔焉曰南禪院
 本尊釈迦無量壽有
 真諦曹源池上建塔

帝之象也院北砌右有杜丹花御愛也其軒曰花玉有御製詩軒後曰詩明四明東陵城家
 昏後有万手軒以双松得名有并日軒碧有左方九石一草木皆是名品佳古松龜田楓樹數
 片歌津蝦蟇 此寺之盥鉢也 太上皇嘉元三年九月望奠齡九十七崩于龜山道浮屠 祠南
 至今尚存焉 法火化遺教以院金剛峯寺淨金剛院三所分玉骨收蔵 祠南

有一塔 本尊釈迦塔様多寶四圍繪法華
 說相大宮仙院御骨閣蔵此下

塔上有山其形如摩尼寶 神龍窟于此

塔上有山其形如摩尼寶 神龍窟于此

有水涌出落澗曰曹源水云傳于庫院以供合山清衆也池之尾一橋跨空曰合澗之水東自駒瀑流出而合也云瀑之上二峯層出者曰獨秀天下望也

天授庵山門の南あり當山の開基大明國師の塔所なり大明國師又佛心禪師等其諡

京極安知塔天授庵の墓地あり丹後國宮津の城主從四位下侍從京極丹後守高

細川幽齋塔同所あり正四位下兵部大輔藤孝祝髮

歸雲院方丈の北あり祖田和尚の塔所なり龜山法皇御依あつた師とも

聽松院寺境の北あり庭前の林泉相阿弥の作也

松井佐渡守塔右聽松院あり佐渡守もめの名新介康之元山城國西郊の人也

澄清拙塔同院あり來朝の僧なり名正澄元人愚極智慧の法と嗣嘉曆元年歸

俊明極塔少林菴あり來朝の僧なり元人名八楚俊當山小住

寧一山塔雲門菴あり來朝の僧なり宋人正安中小飯化當山小住妙慈弘濟國

信義堂塔慈氏院あり名八周信當山小住佐國の人詩偈小名あり

慈聖院右日所小塔頭なり應仁年中細川山名爭乱の日南禪寺焦土となりぬ

石大燈爐二基山門の前あり高サ二丈有餘白石あり希代の燈爐なり蓋石は

浴室山門の南あり白檀二株

拳龍池中門の前の池也

金地院池の南あり五山の僧祿司と稱當院の開祖大業和尚なり方丈の間の畷ハ

東照宮御宮同院の南あり地面白砂

樓門正面あり額東照宮

唐門樓門の北あり

青蓮院尊順法親王筆

東照宮御宮

鳳凰竹とゆ

東向

樓門

唐門

北あり

俊伯英塔 同院あり名徳俊入唐の僧なり

綾戸明神社 中門の外池の西あり 鳥居 南向

祭神 寺記云世傳ふ文應帝の牛飼人綾戸の小路に住み常小醇酒を造り献じた時大祠と建つ此小移り位を正しく道と夾み松を兩行小植山門の境致す

綾戸の小路 天授菴の前小通はむ 行宮の通條なり

獨秀峯 當山第一の峯なり 羊角嶺 鐘樓の上の嶺なり

神興庫 總門の北の方あり綾戸のやらの

總門 西向門前の馬場ハ左右松を中より最長し此所小丹後屋と云ふ古き茶店有

夫當山の其始ハ三井寺の別院なり最勝寺と号し或ハ最勝光四天

王寺又ハ最勝光院と云ふ然る小此院小道智僧正 其政從一位太政大臣良經公の男或ハ

光明峯寺入道攝政道家公の息男と云ふ小狐の住せり其後より小星霜と坐す

僧正と号し三井長吏禪林寺又常住院と云ふ

弘安年中 太上皇龜山院此地小離宮と云ふを給ふ小より宮外

小ハ公卿の館覺と連滔々たり然る小正應のをもり宮中小物怪

つらつ障をちり 晝夜小物怪出る事一千余なり衆人志ざり安寝

こゝにせげ陰陽頭小れをト巫しむ小故最勝光院の僧正道智の

靈のころそく此地を秘惜し障導をちりし故小南都北嶺頭

密の諸師下ハ咒術巫祝ふ及ぶ百計手拱く同四年禪徒小勅有

東福の釋普門 當寺開山 無開和尚 命を請く二十の禪侶を率く宮中小安居居

更九旬就中祖圓和尚とれ冠たる別行なく唯二時齋粥四時座禪と

の然る小物怪跡を匿し上下とも安泰小寝る更と得たり上皇歡感の

余と普門と礼し加梨鉢多とけ給ふ又宮と華やく寺とを給ふ上皇ハ

下ハ今の方文龍洞室 大明國師 無開和尚 普門 を住職とす御飯依ふ祖圓

和尚を共小舉く兩開山と称せり遂小命は佛殿を創建す

釋迦の座像と本尊と文珠普賢の脇士を安け又金剛力士の二體と安

置け此力士の靈像ハ其初八體を安け回祿の時今の二體飛出く石上

在せり尚此余力士の靈驗數あり爰略大僧正道智の靈と祀す

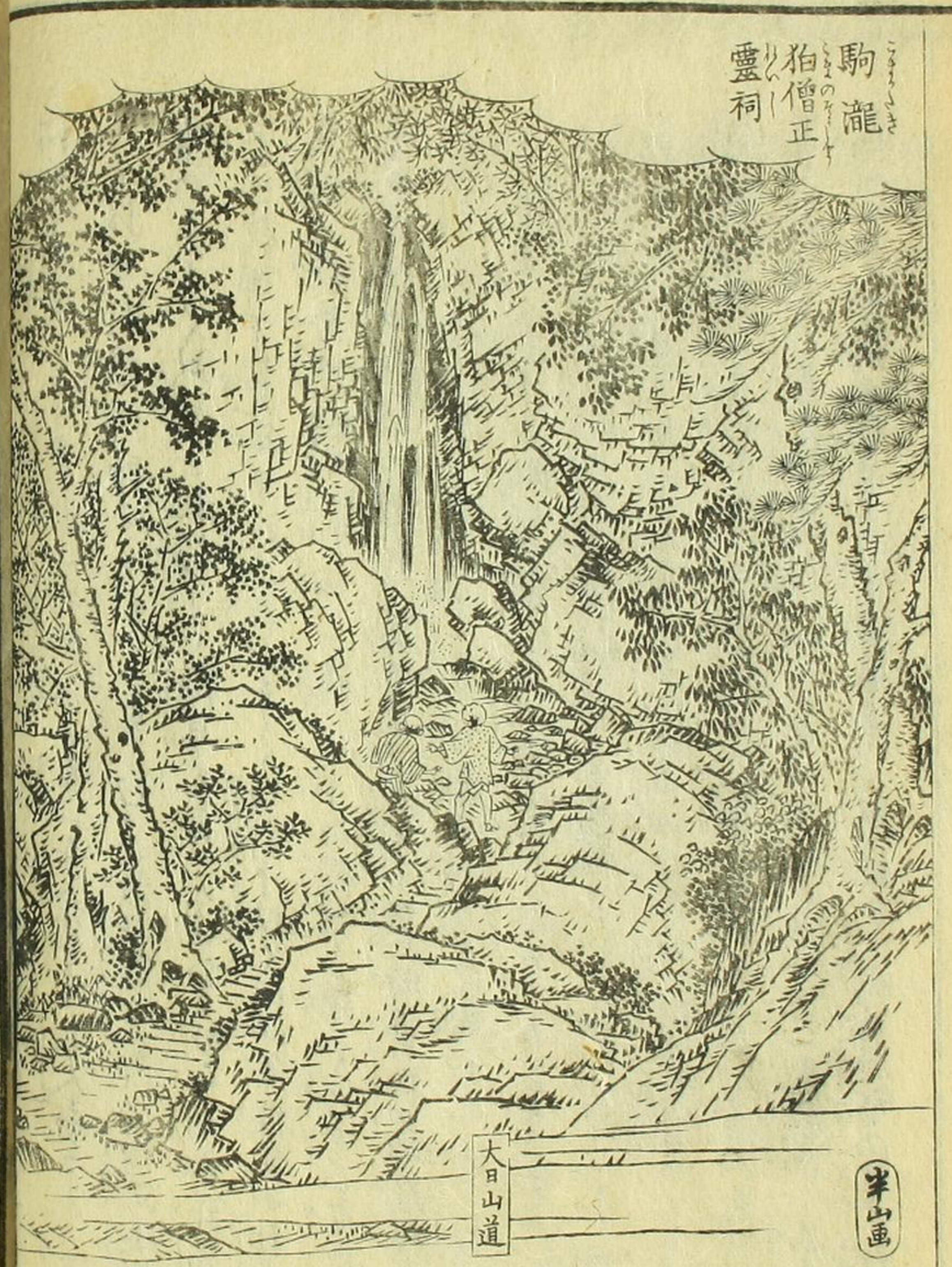


まじりに
こころのしづ
かたむね
おんけい
おんけい
おんけい

湧つたふ
せいの
せいの
似水

護法神

南禅寺裏門道



駒龍
狗僧正
靈祠

大日山道

半山画

當寺の護法神社と駒が瀧の側小建とこれと神仙佳境こら

駒瀧獨秀峯の下あり巨巖左右小岬樹木茂く

日工集云水徳三年七月八日上生院小赴云點心罷駒瀧會久

雨降瀑漲事練と垂る如四山の爽氣恰と洗ふ似た皇府君唱く

曰待々せ秋の月毛の駒が瀧

撰政殿これと數美給ふ猓猴あつ至る獨の老猓猴亭座小迫ア

食と覓む諸人菓餅等を擲くと此と飼ふ猓喜踊く神祠小登つ手

づ門扉を推くと開く祠乃ち熊野権現を猓蓋其使者の

感吉北よりと一按ずり小祠ハ僧正の契と祭り諸書小見たれ世人疎畧小為さ

拍僧正靈社同意の傍あり寺記曰道智僧正物故神と此瀑小棲も故小世小駒の僧正

藏春峽壑雷橋同吳祠の傍あり蘿月庵同上念好亭吳祠の東ありと

山州名跡志云南禪寺草創より先小所住人勝時尚藤信頼の子の

寺記の注云平治の元金吾將軍藤信頼伏誅其子其家小金多き以て人金侍後と

而一遂小金龍と埋めく以て此地の鎮とす

源有房寺房郷一條左大將寺記云上官松本慶

門脇中納言注云良佐小龍與水あり道智僧正前云駒の僧正なり

真觀上人寺記云少林舊勝林と名草河真觀上人故居也注三觀宋小入居事

西福寺南禪寺門前民家の北あり其始り淨宗西山流中一玄智和尚の開基なり

本尊阿弥陀佛立像長三尺惠心僧都の作觀音堂門前の傍あり

上田餘齋墓堂前あり碑の高サ二尺七寸中堂又一寸五分墓石蟹の形

此蟹の墓石ハ餘齋曾々伏水の山中小これと得く大お愛り常小閑居の履脱ふきえく用ひ

中小遺骨と納りと一即像の昔書附小自筆あり傳と記せり女人ハ浪花の産所也

上田氏名ハ初成齋と号無腸居士と一和哥と善一國學小精一煎茶一家と云俗

業とさひく花浴小のり南禪寺の雜学儀見氏の懇意と云り其家のやり小四世半

の居と云りといくれと鶴居と号一又鶴の屋と一生涯奇話多く一一容易尽一つた

余齋自作の像の管小記一一云

無腸生浪華一若于京師一十六季無父不知其故四歳母亦持有傳上田氏
所親歳六養母逝性多病時收發驚痾後母依慈愛成長歳卅七
父逝三十八係同祿失居始於京攝々間移宅凡十餘度每地在神
如近似逐生活高戸破産一為医患疾不立業泊坐廿年其間既

好国々國詩、不以爲業、年五十七頓失左明、六十五僥倖遇神醫得
左明、又及右眼、後母給仕、五十三年亡、妻糟糠廿八年、今年七十
位嗟乎、天の何生我耶

老わく世の人をなすは海ありわきの男なりと

上田無腸翁之墓

凡物之異常者物之病也然世俗在物貴其病在人忌其病露之
成膏霜之成華天之病也山之峻峻不可梯水之洞滿不可攪地
之病也柏之有文竹之有岐草木之病也茶鐘之有蜜變陶之病
也石之有眼硯之病也巢許之狷夷齊之清陳仲子之潔人之病
也世俗在天地山川草木器械患其病之少在人則忌之畏之避
之如蛇虺不亦太左乎吾友無腸翁狷介峭直視富貴如腐鼠以
俗士爲蜣螂世俗忌其病畏而避之遊其門者履履如也然一毀
一譽於翁乎何有翁初在城中厭其擾擾遂苦菴于瑞龍山中一
裘一褐疏糲自安翁博聞彊識過眼爲誦是以不蓄一書室中唯
有一二茶具而已最長于國字文章及國風之詩興到則一日數
十百篇言出于口皆成文所著數種已行于世又有萬葉集訓詁
及筆記八十餘卷一日命其徒湮之廢井中余聞之也遲不能奪

去藏之名山嘆惜無及後值翁詰其故翁咲曰一時謾筆意未盡
者頗多矣然年力頽侵不能就區區鉛槧之業且與夢中說夢向
癡人不如投井中清我魂頃者仿曾補好忠每月集賦三百六十
首使余題其首余讀之往往不能得其解復何以足知神出鬼沒
之妙焉然余識翁舊矣因略序其爲人未知後世以翁爲文苑傳
中人耶爲隱逸傳中人耶其必有辨姑記以備史料

右榜亭先生題無腸翁所著後每月集之辭也翁嘗屬其徒大
澤春作曰此辭能說破吾之爲人吾死則請畫石以勒此辭不
必要另費諛墓之饒語焉今茲辛巳六月廿七日春作與同志
者修其追祭此爲十三週之忌辰因亦相謀欲從遺囑以期不
朽乃使余操筆余之於翁亦相識也義不可辭揮淚書此

平安 紀惟德誌
浪華 森世黃隸

文政四年冬十一月

順正書院

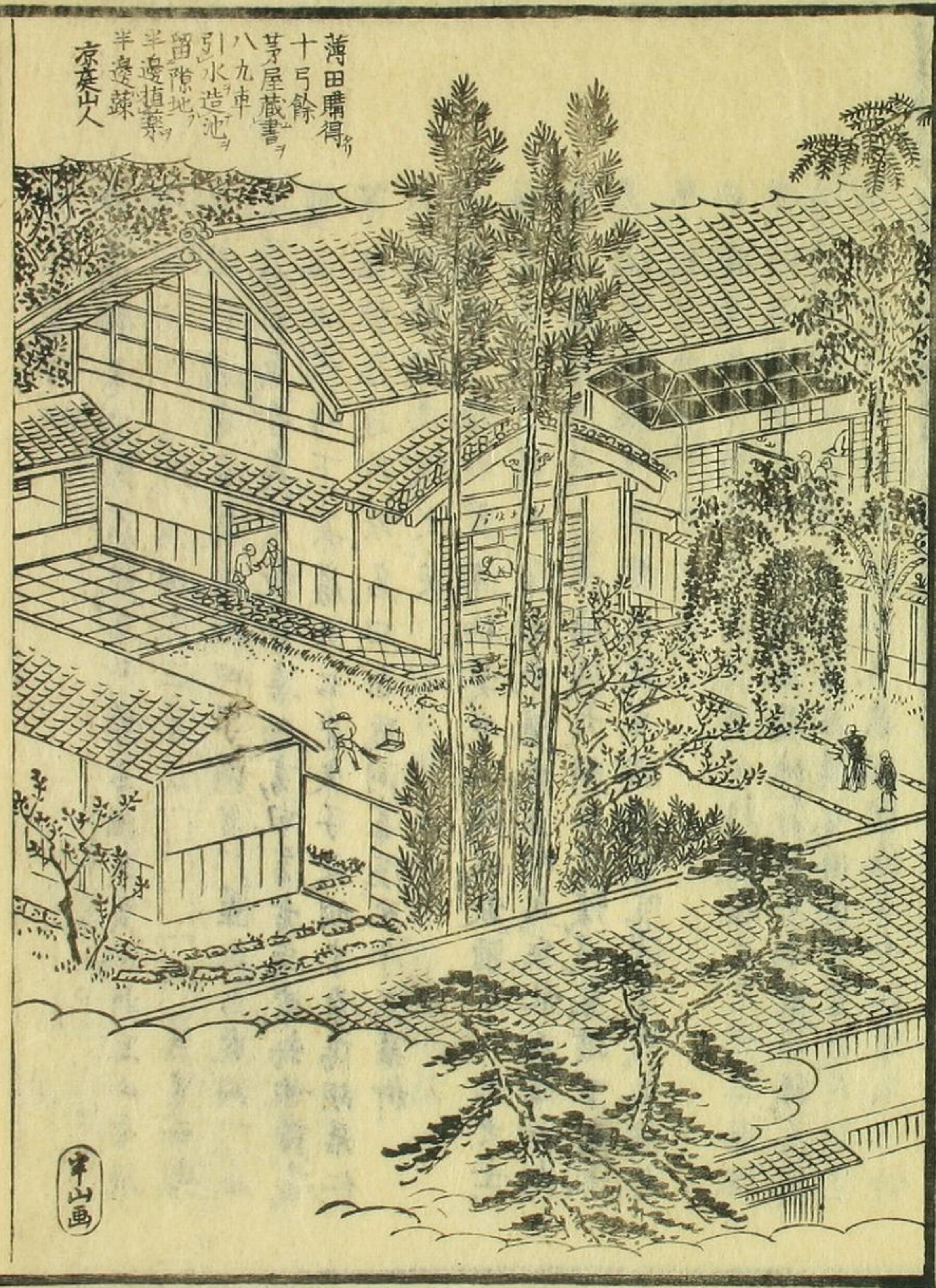
南禪寺門前松林の北傍あり近年医家新官氏の創建より所の學校なり
園中數百畝菓樹ふよひ繁草と種池小龜池とあり

講堂

玄關の額順正書院の大字、
文庫 祭酒林家の筆

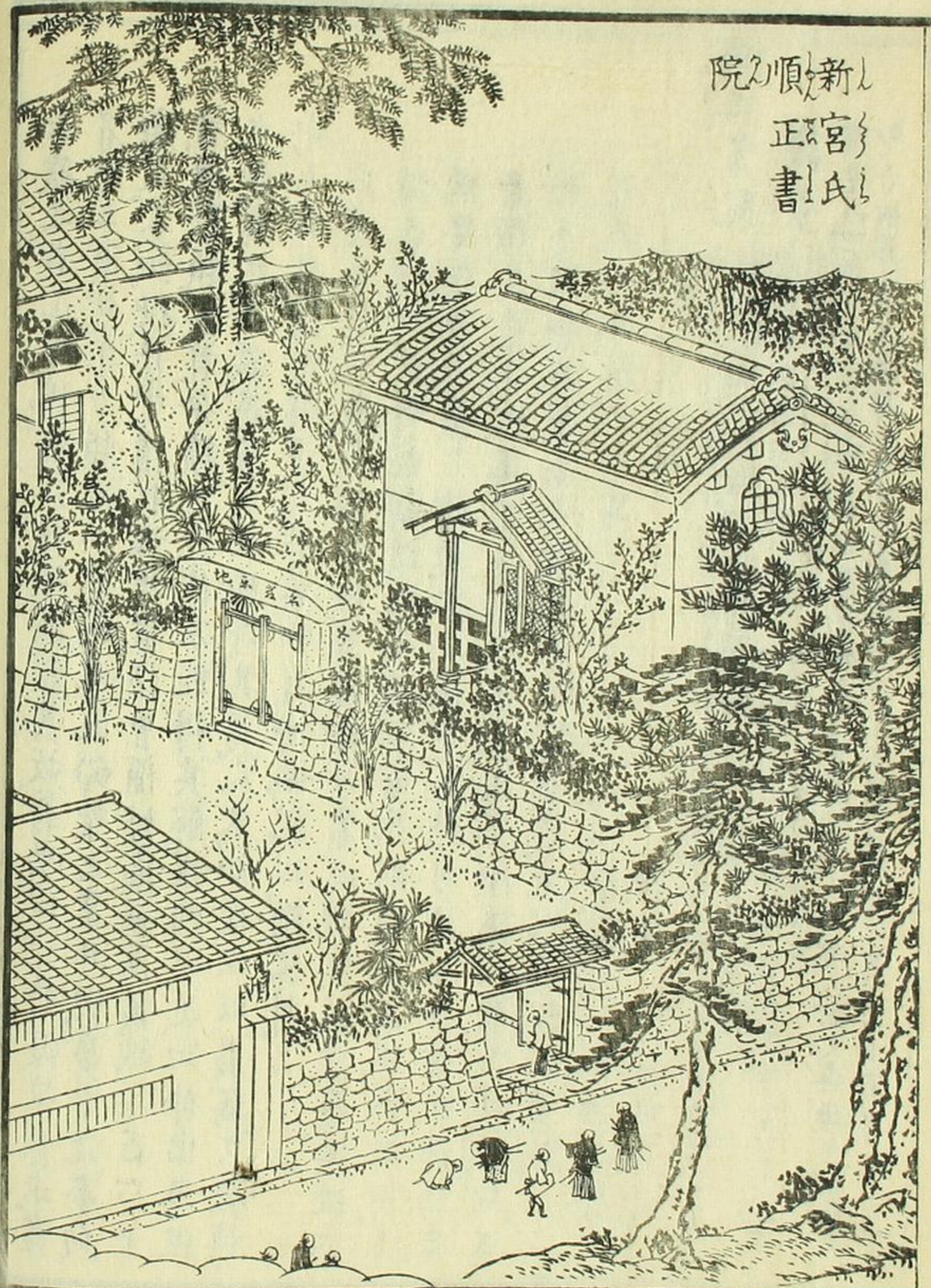
講堂の四面、東武佐藤一舟浪華被崎小竹おと海内の名儒の記文扁額十余扁と
かゝる例月三日講譯正月廿三日開講十二月十三日止春秋仲月十五日釋菜

薄田購得
十弓餘
茅屋葺書
八九中
引水造池
留隙地
半邊植菜
半邊疎
涼庵山人



中山画

新宮氏
正宮書院



東山七十六

順正書院記

丹後新宮涼亭翁位宗師棲年徃年冥地於东山南澤寺
林祭酒書名教樂地四宇遍其門蓋取白鹿洞門扁
之義也屬余為之記余喜而書曰昔者唐李勣始讀書
廬山五若峰下其後文公朱夫子及明李慶陽胡居仁
單相繼講道於此名曰白鹿洞書院至今不衰抑
本朝學校之設久矣

大内裡之時始置淳和獎學二院以教源平二氏之士
而書院濶習則不聞也至源倉室町氏兵亂不已士大
夫之教廢池及江戶府開大開弘文館以育旗下之士
其他大小諸侯學校之設日盛而書院濶習則未聞也
然則今之有以舉也矣

本朝書院之權輿欽其亘傳之於後益大之使与麻洞
并於東西也地以久為廢地翁得之手披荊棘莠
葦命之管之費教千金蓋在講習道義其意義矣願在
後之守之者何如而已夫桑田碧海古今沿革不一則

安知書院之不變為佛塔僧菴為園圃汗池為歌畝町
畦荊棘蒺藜使貫美意卒湮滅于無聞哉子孫其宜守
焉而無失焉子孫不能守焉則請之於寔破則葺而新
之壞則修而完之百業之後使為
本朝之李勣則豈不翁之榮乎曰翁之榮一人之私也
書院之存國家之公也則使書院存于無窮不為缺典
乎本朝則豈亦不國家之榮乎是余之所以喜書之
者不為翁書而為子孫書也書院之東北土肥壤燥往
將建夫子廟而今未成也
天保辛丑正月 久留米儒員後學後者松樾

此余の記文、小畧也

十禪師辻

南禪寺の前南北の大路の四辻をいふ古所小十禪師の社の鳥居あり故
以通と鳥居大路とをいふ十禪師の社今青蓮院の管内小座あり

著聞集云一條院の御時御秘藏の鷹あり云件鷹を粟田口
十禪師の辻ふつとささき行人小見せしむる

大將軍社

右同所の北大路の東側ありいふ大將軍の神と玉城の四隅小祭
すは是より今八社座の杜の名残近來地藏の小堂を建てる標あり

尊良親王墳

永觀堂門前條南傍田圃の中より後醍醐天皇第一の宮一品中務卿尊良親王八元弘の乱小土佐國畑小配せられ後飯浴ゆつて延元二年三月六日越

前國金ヶ崎小自越一ヶ所年二十七

按ずり小太平記小越前金ヶ崎ゆりて新田一族の首と京へ上せたり大略と渡りて獄門小かく一の官の御首ハ穢林寺の長老夢想國師の詩小おくれ御葬禮と執

行々云々塚ハ其御首と葬りて一ヶ所年二十七

南山小譜云後醍醐天皇一宮尊良親王

母贈從三位藤原為子 權大納言為世卿女

應長元年誕生正中二年元服二品中務卿元弘元年帝小從一宮置小

入迂河内國東条城小入同年十月二日自出囚小就同二年三月八

日土佐國小配せり同三年八月飯洛同年九月廿二日一品小叙於延元

元年十月立太子北國小入同二年三月六日越前國金崎城小於自赦

年二十七云々

東山名勝圖會卷之壹

早稲田大学図書館

011688995878